

りません。

それが貴女の方で出来るとしたならば、國家社會に取つて、大問題が起るわけです。昔の釋迦やキリストは、即座に靈の力に依つて、蹙が立つたとか、盲目が開いたなごご、書物にも書いてあるし、傳導師などはそれを、非常に誇張して話して、有難がつたり、勿體ながつて、宣傳してゐますが、既にこの世になくなつた、數千年前の人の事を、眞實か否かと調べる道もありませんから、何れとも信する者の心に委せるより外はありません。

しかし今貴女が、即座に悩みを取除く事が出来るとしたならば、それこそ、釋迦やキリストの、再來といふよりも、科學萬能の今日では、由々しき社會問題であると言はなければなりません。」

直代は容を改めて、きつとして部長の眼を見凝め、
「それでは貴方は、私の申上げる事は、根據のない出鱈目で、世の中の人をまごはす

ごでも仰有るのでございますか。」

「いや、さうとばかりは言ひません。

しかし貴女の言はれる事そのまゝを信する事も、出来ないのです。

若し貴女が實際にさうした靈力を持つてゐられるといふのなら、目前にでも見せて頂いて、はつきりごこの眼で確認する事が出来た場合にこそ、初めて貴女の力を證明する事が出来ると思ひます。

如何です。物は試しですから、私の見てゐる所で、治して見て下さいませんか。」

「それは何でもない事でございます。けれども餘り屢々神の力を試します事は、畏れ多いと思ひますから、萬一貴方が誠心誠意私の靈力を試して見て下さるといふ御思召でございしますならば、署長様にお目にかゝらせて頂き度いと思ひます。

その上で署長様が、私をよく御了解下さいましたならば、署員の方が残らずお集り

下さいました所で、ごの様な病人でも、又心に悩みがあつて、救ふ事の出来ない人を、御覧になる前で、お治しつて、お目にかけて度いと存じます。」

直代の當然の申出に、拒む事は出来ませんでした。何故なれば話し合つて見れば、益々性格がはつきりしてゐて、精神にも異状なく、教養も深く、信仰上の深さも計り知れないと思ひましたので、岡田部長は一先づ取調べはそこで止めて、高木署長へ逐一報告致しました。署長は深い興味を以て、始終の報告を傾聴しました。

「いやよく分りました。」

御苦勞でした。では一應本人を此處へつれて来て下さい。逢つて見ますから……。」

「承知致しました。」

早速刑事部長は、直代をつれて、署長の部屋へ入つて来ました。署長は立派な體格をした、温厚さうな人です。

入つて来る直代をにこ／＼し乍ら好意を以て迎へると、

「まあおかけなさい。」

と椅子を俯めると、嚴然たる態度で、

「實は貴女の事に對して、岡田部長から委しい話を聞きました。」

貴女は永い間苦心された信仰から得られた靈力を、私始め署員の目撃してゐる前で實驗し度いと申出られたさうですが、それに相違ありませんか。」

直代は署長の顔を見凝めると、につこりして、

「はい、さやうでございます。」

同じ事を何遍も試されます事は、私がかまひませんが、私を御守護になり、私に尊い靈力をお授け下さいました神様に、畏れ多いと思ひますので、成るべくお試しは一度にお願ひ致し度いと思ひます。」

尤も警察の方のみでなく、政治家の方でも、宗教家の方でも、教育におたづさはり

になる先生方でも、商業の方でも農業の方でも、御希望の方がありませんたら、御参考のために、御一緒に御参観下されば、尙結構だと存じます。」

はつきりと自分の意志を申出た、直代の態度と目の色を見つめ乍ら、署長は何とも言はれない審しき感に打たれて、

「ふふーん。」

と言つたまゝ、目を閉ぢ腕を組んで、じつと考へてゐましたが、暫くするとかつと目を開いて、傍の椅子にかけてゐる、刑事部長を顧みて、

「岡田君、どうしたものだらう。」

「本人がかうして、はつきりとした確信を持つて言ふのですから、一應本人の申出の通り、實驗をさせて御覧になつたら如何でせう。」

「さうして見やうかね。」

署長は急に態度を變へ、直代に向つて

「尙署員の者ともよく相談して見て、出来るだけ貴女の申出を採用して、實驗して見て貰ふ事にするから、それ迄當分何處か宿へでも、引取つてゐて下さいませんか。」
直代は笑つて、

「私は永い間、かうした生活をしてゐますので、宿なんかで泊つた事はございません。それに風采もかうした變な體裁でございますし、宿賃をお拂ひする様なお金も持合せて居りませんから、お許しが出る迄は、何處へも參る様な事は致しませんから、それまで那智山へ歸して頂けませんでございませうか。」

「山へ行つて、さうして生活するのです？」

「第一食物がないじゃありませんか。」

「いゝえ、山には人間の食べられる、木の實も草の實もございします。自然に恵まれるお水が澤山ございしますから……。」

「冗談じゃない。それじゃまるで仙人みた様じゃありませんか。」

「でも本當に徹底した修行をしようと思つては、宿へなご入つて、人並の宿の御飯を、頂いたり致しましたら、忽ち生活費が缺乏して終つて、生きて行く事は出来ません。」

それこそ修行どころではありません。

本當の修行者は、衣食住に不自由を感じない様に、大自然の中から、心身の糧を求めて生きなければ本當の修行は出来ません。

これだけは昔も、今も心の道を求めて進む行者の生活に變りはないと存じます。」

それを聞くと、署長は「分りました。しかしいつまでも仙人の生活をするのが、貴女の元來の目的ではないでせう。」

今から世の中へ出て、誠の人の道を開き度いといふ、念願であるといふのならば、先づその社會へ再現の一步として、私の家に泊つて下さい。」

實は私の妻も、非常に信仰を持つてゐますから、貴女のような方がお泊り下されば喜ぶでせう。

何もおもてなしは出来ませんが、窮窟な思ひはさせません。」

岡田部長も

「署長さんのお宅へ泊めて頂ければ、この上ない事じやありませんか。」

是非お願いなさるがよろしいでせう。」

直代は極めて純真に受入れて、

「そんなにして頂ければ、真に有りがたうございますけれど、何分長い間浮世を離れた、蠻人の様な生活を致して居りましたので、昔習ひました禮儀作法も忘れて終ひまして、御挨拶の仕方にも存じません程、不作法になつて居りますが、お許し頂けましたら、御厄介になり度いと存じます。」

「それはかまひませんよ。さういふ事なら私が御案内して、家内や子供にも御紹介し

ませう。」
署長は氣軽く椅子から離れると、程近い官舎へ歸つて行きました。
その様子を眺めてゐた署員は言ふ迄もなく、町の人々も奇異な面持で眺めて居りま
した。

慈光に觸れて

或日高木署長は、直代を自分の前へ呼んで、

「實は里見さん。

貴女の御希望を容れて、一般の人の前で、貴女の靈力の實驗を見せて頂く様に、今
準備はしてありますが、こんな事を申しますと、大變貴女の力に疑問を持つてゐる様
に思はれるでせうが、矢張り私としても、責任のある事ですから、實際に貴女が、

御自分で仰有る様な、力があるかどうかといふ事を知つておく必要があると思ひま
す。

又有るとしたならば、廣く知識階級の人にも、御紹介し度いと思ひますので、この
間中から、岡本典獄や、裁判所の判検事の、最も親しい方々にお話をして見ました
所、皆さんの言はれるには、一應適當な患者又は精神的に悩む苦惱者に對して、貴
女の靈力を應用して頂いて見たらと言はれます。

私もそれが最上の方法だと思ひましたので、二三さうした人物を、刑務所の方か
らと、警察の留置場にゐるのをお尋ねしておきました。

どうでせう實驗を直接見るのは、僅か四五人なのですが、今日午後應用して見て頂
けませんでせうか。」

懇ろにさう言はれると、直代は純眞に受けて、
「承知致しました。」

それでは一度その方達にお目にかゝらせて頂きます。

大體の御様子は、ごんな境遇にある方でございませうか。」

「病人の方は、今から三年前に入所しました、前科十六犯もある、兇暴な犯人で、ごうしても監守の手にも負へない様な人間で、みんなが手をやいてゐます。

却々改悛の見込がなく、世の中へ出しても、害を一般に及ぼすから、成るだけ刑務所においた方がよからうと、言はれてゐる様な人間です。

さうかと言つても、無期徒刑囚として、網足へ送る程の、大罪も犯してゐませんので、そのまゝこゝにゐるのです。

性質が兇暴で、残忍性を持つてゐますので、油断すると他の者を煽動して、破獄を企てると言ふ様な囚徒で手に負へないのですが、せめて一日でも眞人間の性にかへらせてやり度いと、典獄さん始め、教悔師なども、手を換へ品を變へして、教訓して見ましても、益々強い反感を抱いて、兇暴性が増すばかりですから、みんなが困

り抜いて、別な監房へ移さうかと言つて、相談してゐる様な人間であります。

それがごうした事か、二ヶ月程前から、病氣のために、腰が立たなくなつて、暴れる事が出来ないばかりでなく、歩行も出来ないで苦んで、人の顔さえ見れば、殺して呉れなごと言つて困らせるのです。

今一人はつい昨日の晩ですが、これは三十前後の婦人が、警察へ出し抜けに飛び込んで来て、目の色を變へて、誰か後から、今に追かけて来る様な様子で、半ば狂亂して話すのには、その人は夫婦の間に、二人迄子供があつて、仕合せに暮してゐたのが、良人が去年の秋死んだので、幼い子供をつれて淋しく暮してゐるらしいのです。

資産も相當あり、預金も相當あつたので、生活の方の事は餘り心配しなくてもやつて行けると安心してゐた所が、親戚の者が寄つて財産の整理をしてやると言つて、世話をしてやつたのはよかつたが、知らぬ間にその妻君の印を持出して、株券や貯

金を、大分分けて取つて終つたらしく、實際自分達のものとして與へられたのは、自分の物と信じてゐた、凡そ三分の一位しかなかつたさうです。そんな事のために、随分興奮して、兄弟達を罵り、口論して、自分が興奮するだけでなく、相手も相當怒らせたらしいのです。その結果、感情が激昂した餘り、ヒステリーを起したのです。そして、親戚や主人の兄弟がみんな寄り集つて、私達をみな殺しにして、財産を横領しやうと計つてゐる。

かうしてゐれば、自分も子供も殺されて終ふから、保護して貰ひ度い。さう言つて、一人で泣いたり口走つたりしてゐますので、一時留置場へ入れて、保護してゐますが、段々聞いて見ると、本人の言ふ様な事は、全然嘘で、主人といふ人は生前却々賢い人で、商法の腕前もしつかりしてゐて、外觀は立派に營業をして來たけれど、最近の不況のために、少し損害をしてゐたので、兄弟達に保證をさせ

て、銀行から資金を引出してゐたさうです。

けれども家内には、安心させるために、株券等も相當持ち、貯金も子供達にも相當させ、自分達にもして、餘裕がある様に見せて、安心させておいたらしいのです。察して見るに、お神さんが、少しヒステリー氣持なので、さうした心遣ひを忘れなかつたものらしい。

所が主人が急に亡くなつたので、悲しみのどん底に落ちて、悲嘆の極に達してゐる所へ、貯金や株券がごしく處分され、自分の者と信じてゐか貸屋や田地迄、名義が變つたので、兄弟達に詐取されたご、取り逆上せて終つたらしいのです。

誰が何と言つても、親戚達が寄つて殺すごか、横領するごか言つて騒いでゐる、これは強烈な精神病者です。

かういふ者には警察でも困りますが、引取つて行つても、親戚も困るらしいので、結局は脳病院へでも入れなければならぬ事になるでせうが、今の所、それ程にも

狂亂してゐません。

氣もしつかりしてゐますし、言ふ事も違つて居りません。

唯親戚の者が慾のために心が狂つて、自分達を迫害して、自分達を殺しに来ると言つて、極度の恐怖心に襲はれてゐるのです。

こんなのが、貴女の靈力を試して頂くのに、最も適當なのではないかと思ひます。その話をじつと、うなじを垂れて、聞いてゐた直代は、深くうなづくこと、につこりほゝゑんで、

「よく分りました。

では早速お目にかゝつて試させて頂きませう。」

と話が決まると、直代は晝食をすますと、署長夫人の厚い情で新調して與へられた、上品な衣服に改め、髪も束髪に上げて、何處となく氣品の備つた態度に改つて、署長に導かれて、廣い應接間へ參りました。

其處には誰とも別に紹介は受けませんが、相當身分のあるらしい紳士が、五六人控へて居られました。

直代は目禮したまゝ、指圖された席へ進みますと、その前には、署長から聞いたよりも、尙一層物凄しい相好をした、病囚が、淺間しい獄衣を身に纏うて、世界中の者は皆、自分の仇敵だと言ふ様な、物凄しい目付で座つてゐます。

それから一間ばかり離れた所に、姿形も上品で、着物も垢抜けのした銘仙を着て、一見中流、商家の妻らしい型の婦人が、うつむき勝に、何か深く考へ迄んでは、折々溜息を洩らしてゐます。

直代は先づ近寄つて、男の老病囚に對して、怯氣もなく、微笑み乍ら、言葉をかけました。

「小父さん。貴方體のお加減がお悪いさうですね。」

直代から懇ろに言葉をかけられると、囚人は異様な目を輝かし乍ら、如何にも殘忍

さうに、

「生意氣な事を言ふない。」

何處の女つ子か知らないが、俺はお前見たいな者に、小父さんなんて言葉をかけられる覚えはない。

お世辭を言ふない。面白くもない。

ふん、人を馬鹿にしてやがる。」

この悪口に、周圍を圍んでゐる人達は、呆れ果て、直代が吃驚するかど、固唾を呑んで見てゐます。

直代は少しも意に介せず、尙も言葉を優しくして、

「まあ、そんなひどい事を仰有るものじやありませんわ。

小父さんだから、小父さんと言つたのですもの、いゝじやありませんか。

血統を引いてゐるゐないなんて事は考へなくとも、みんなこの世の中に生きてゐる

人はみんな兄弟じやありませんか。

共に手を取つて、楽しく幸福に生きて行くのが人の道ですわ。

私は心から貴方を、親しい心持で、小父さんだと思つてゐますから、その通り小父

さんと呼んでゐるのです。」

囚人は苦笑ひして、直代を揶揄する様に、

「ふん、さうかい。」

そりや面白い。よく色々な坊さんなんかど、時々やつて来て、如來様だなど、言つ

て話して聞かせるが、お前はみんな人は、神様の生んだ兄弟だから、この世に他人

はないといふのかい。

なら俺は聞くが、世の中の奴等はみんなして、俺を寄つてたかつて、虐めやがるんだ。

温い情のある様な奴は一人もないんだ。

刑務所から出る時、今度こそ眞人間にならうと、固い決心をして娑婆へ行つても、世の中の奴等は、前科者だくと爪弾きをして、まるで腐つた蛇か何かの様に、撥ねのけやがるんじやねえか。

働かうにも働かして呉れず、みだりに寄つてたかつて、虐めくさつて、食物も與へないで見殺しにしやがる。

俺は折角生れて来た命だから、一日でも半日でも餘計生きてる度いが、喰はずにや命が持てないから、悪いのいゝのと、そんな事を考へてゐる暇などはなくなつて、他家の物を搔拂つて来るんだ。

そして何遍でも、かうした冷い監獄へぶち込まれて、その度に前科何犯々々と數が殖えて来るんだせ。おい。

さうすると、同じ囚人の中じや幅は利くが、見張つてゐる鬼の目は、段々強く光るんだ。」

「おいこら何を言ふ。馬鹿!!」

と傍に附添つてゐた監守は怒鳴りつけました。

署長は笑つて、

「まあ、よろしいよ。言ふだけ言はせてやつて下さい。」

と言ひました。

それを聞くと、囚人は一層調子に乗つて、

「姉さん、俺はこれで、前科十六犯といふ、大した代物なんだせ。

村で言へば村長、市で言へば市長の格は持つてゐるんだ。監獄の中じや、相當尊敬されてゐるんだ。

監獄の中じやこそ、碌でもない兄弟達から、兄貴々々を尊敬されてゐるが、娑婆へ出ちや、誰も見返つて呉れもしないんだ。

だから俺は、娑婆なんかへ出度くないんだ。

それをお前は、何處から来たか知らないが、お世辭にしても、小父さんの兄弟だのと言つて、人を嘲弄する位なら、俺がお前の手を握つたつて、怒りはしないだらうな。

「ごうだい。よう手を出さないだらう。」

神様だ佛様だ、愛だの慈悲だのつて、神様佛様が聞いて呆れる。

ふん、馬鹿にしてやがる。」

益々暴言を吐きかけます。

直代は何と言はれても、少しも驚いた様な顔もせず、尙進んで、

「小父さん。貴方は間違つてゐますわ。」

何で私が貴方を軽んじたり、嘲弄したりするため、小父さんだなんて呼びかけるものですか。

大人しく貴方から、手を握つて頂くのを待つ迄もなく、私進んで小父さんの温い手

を握らせて頂きますわ。」

と言ひ乍ら兇暴な囚人の、荒くれた鐵の様な手を、両手でしつかり握ると、直代は臍から搾り出す様な聲で、

「小父さん。」

今迄眞人間になり度いと叫んでゐた、眞心の目で、私の目を穴の明く程見凝めて下さい。」

と言つて、はつきり目を開いて、輝く様な瞳で、囚人の目を見ますと、

「何だい。俺をどうするんだい。」

と口では強く言ひ乍らも、思ひがけない直代の行動に、膽を抜かれて、思はず顔を上げて、物凄い瞳で、直代の兩眼をきつと見凝めました。

直代はその老囚人の手を握つたまゝ、兩の目射抜く様に、輝く様な瞳で見凝め始めてから、瞬きもしません。

どうしたものが暫くすると、囚人は顔を異様に痙攣させ、泣く様な笑ふ様な顔をしてゐましたが、聽て兩眼を靜かに閉ぢて終ひました。

直代も聽て目を閉ぢて、無我になつて、何事か深く祈つてゐる様でございましたが聽て兩眼を開いた時は、宛ら別人の様な神々しい相が現れて、眞紅な唇からは、玉の様な澄み切つた聲が流れて出ました。

「小父さん。

よく考へて下さい。世の中に澤山人は生きてゐて、色々な地位や身分を持つて自分々の仕事をして、働いてゐます。

けれどもその中の誰一人でも、自分の體を自分の力で造つた人はありません。骨も肉も血の一滴でも、髪の毛の一本でもね。

それなら誰が造つたかと言ひましても、人に造つて貰つたものでもないでせう。天から降りも、地から湧きもしません。

海から上つたものでもないのです。

總べて皆親が生んだのだと、人は思ふでせう。

貴方もその様に考へてゐらつしやるではありませんか。

若しそうでしたら、その考へ方は、大變な間違ひでございますよ。

假令生みの子の父となり、母となる因縁はよし結ばれても、唯父は種となり、母は苗床となつて、その子を保護するだけの力しかないのです。

父母の力で、血の一滴、髪の毛の一筋だにも、幼き胎内の嬰兒のために、造り與へる事は出来ないので。

それですのに子供は、親の胎内を通じて、立派な體を與へられて、この世へ生れて來るのは、何ものゝ力で、どうして出来たかといふ事が分りますか。

元々人の始めは、何も姿も形もない無なものです。

それが形となつて、造り始まるのには、どうした道を辿るかと言へば、父の精を母

が受ける、それを中心として、小さな目にも止らぬ生命が、次第に大きく人間としての體に組立てられる迄には、母が毎日物を食べます。

空気を吸ひます。

又太陽の光りを受けます。

さうした大氣の力と、營養物が、嬰兒の體の總べてを造り上げて行くのです。

こんな尊い仕事を、誰がしませう。

畜類の様なものに、生み下されても、一言一句の不足を言ふ事も出来ない筈ですのに、自由に物を見聞きして、思ふがまゝに活動の出來て、良い事も悪い事も、自分から判断をして、生活をして行かれる程、その體を自由に支配し、命令をする程の魂を與へて、この世へ生み出して下さつたのは、肉身の兩親のみの力ではない。その上に大いなる、慈悲大愛の親神様のお出でになるためであるといふ事が、お分りになりますか。

ごの様な親を撰ばれて、この世に人として生れて來た者も、肉身の親様といふ、一つの器を取り去つて、その上へ行けば、唯一つの限りなく大きく無限に尊い、慈悲大愛の大親様の御旨にある事を思へば、どうしてこの世の中に他人といふものがありませう。

みんな兄弟ではありませんか。

世界を一つの太陽が照し、同じ月や星が輝いてゐる事を思へば、この広い世界、無限な宇宙は、私共人間の親様である事が分りませう。

人ばかりでなく目に見える地上の物總べて、塵一つさえ、一掴みの砂、一滴の水さえ、人間の力に依つて造られたものはないのです。

我が物と思ふ心は、假初の迷ひ心です。

萬物は皆、神様の造り給うた、神の御所有物で、大自然の世界は、絶對不變で、過去將來共に、永遠不滅のものであります。

故に人の住む世は、千變萬化して、有は空に歸り、空は又有となつて形に現はれるものであります。

人にして常に絶對不變な、神様の御心を我が心として、一瞬間も神の恩寵を忘れず神の如く正しく、神の如き廣き心を以て、人ばかりではなく、總べての者に親しんで、愛する深き心を以て接すれば、接するものみな愛に魅つて、楽しくして住みよい社會となるものを。

我から神を忘れて、邪な道に迷ふがために、黑白も分らぬ暗黒な世となつて苦しむのでございます。

今貴方が、自分自身は、親からも兄弟からも、世の中の人からも見捨てられた、憐れな者と、自ら信じて、世を呪ひ、我が身の上を憐んで、我から淺間しき心を持ち成すべからざる事を行ひ乍らも、その心の奥の奥には、誠の神を呼ぶ聲が聞えてゐるではありませんか。

今の淺間しい境遇に落ちて來る迄の道は、必ず同情すべき山々の事情のあつた事は知れてゐます。

胎内にあつた時の、両親の行動性質の感化や、生れ出で、嬰兒の頃から、知らず／＼の間に周囲の者から與へられる感化と、境遇に依つて、思はざるに誤れる習慣風紀雜念等を、その體に植えつけられ、周囲をも圍まれて、何時となく、我を偽り人を偽り、次々へと罪へ罪へと、人の道を違へて、嘘偽り、盗み詐りへの外道へ陥つたために、今日のような境涯に苦しまなければならぬのです。

これは人として生れ出でて後の境涯が、貴方を苦惱の世界に導いたのであつて、神の生み給うた心ではありません。

神様は總べて、生みの子の上に、一生涯心にも體にも、病なく安らかに平らかに、楽しく共に生き榮えよと、大いなる願ひを垂れ給うて、祝福してゐて下さるのです。それがためにこそ、御覽なさい。

太陽は神なるが故に、善惡の區別なく照し給ふ。

水空氣共に、善惡を區別して、惠みを分けるものではありません。

如何なる者にも、平等に惠みを分け給うてゐます。

唯大自然の御親の恵みに感謝して、天と共に、眞心を捧げて働く者は、心身共に、

壯健にして富み榮え、神に背きて憎け争ひ貪るものは、自己の天に背きし罪に依り

て、自ら阿修羅地獄を造り出して、心身に耐え難い苦しみを受けるのです。

貴方が今、眞心から朝夕お世話下されて、眞人間に救ひ度いと、願つて下さる典獄

教悔師、監守の方々の慈光も分らず、世を呪ひ人を呪ひ、果は肉身の親を呪ふとい

ふ事は、眞に誤つてゐます。

自己の犯せし罪に依つて受けた、現在の苦惱から脱れやうとするならば、生れぬ前

の自然の親様の御旨に還つて、總べての罪を詫びて、心身のお浄めを受けて、新し

き心身の生命を受けて、兩び世に生れなければなりません。

そのまゝで心さえ改めれば、新しい心身の生命は得られます。

今私は貴方の魂を迎へて、神の御前に跪いて、新しき生命を授けられん事を、神様に祈ります。

貴方も無我無私となつて祈るのですよ。

さうすれば貴方の罪によつて作られた病氣は回復して、元氣百倍となつて立上り、

心の曇り汚れは取り除かれて、周圍を照し、人の世を照す程の力を與へられます。

信じなさい。

人類を平等に慈しみ給ふ、大悲大愛の御親の神の御力を……。」

息もつがずにそれ迄、説き明しをしたかと思ふと、一層深く何事かを念じて、囚人

の手から兩手を放つて、頭に頸に手を觸れて、二三歩後へ退つたと思ふと、見る間に

不思議や、今迄の兇暴な老囚人は、かつと目を睜きました。

その顔の色目の光りは、今迄の相好とは打つて變つて、歡喜溢るゝ様な面ざしと變

じ、目は慈光に輝いてゐます。

「あゝ、有り難いく。」

私は救はれました。

今迄私は悪かつた。あゝ悪かつた。

神様ありがたうございます。

よくこそこの私をこの大悪人をお救ひ下さいました。

あゝ有りがたい〜。」

と喜んでのたうち廻つてゐる中に、つと立上りました。

それに續いて驚くべき事は、一問程離れて、うなだれてゐた、恐怖症に罹つてゐた婦人が、歡喜に満ちた、清々しい眼で、板の間に座つて、直代の方を拜んでゐます。異様な光景です。見ると、

直代は無言のまゝ、その婦人の方へ向つて合掌して、何か唱へてゐました。

いよ〜神の靈光である萬壽華の花は、此の一瞬から、地上に開き始めたのであります。

周囲の人々は餘りの奇蹟に驚嘆して、口を利く人もありませんでした。

慈愛の小袖

これと言つてする事もなくて、十日ばかりの日は明け暮れました。

この土地では曾てあつた事のない警察署が主催となつて、直代の思想善導の講演會は、市の公會堂で、開催される事になりました。

時は恰も滿洲事變を中心として、内外に非常時局を控へ、國難前途に迫るといふ、容易ならぬ時勢で、彌が上にも民心は緊張してゐる時であります。

講演者はこの程那智山に現れて、奇蹟を現はしたといふ、怪女修行者であり、警察

ではその筋の權威者の目前で、一大奇蹟を現はし、驚嘆せしめたといふ噂が洩れてゐますので、その波紋は全縣下に擴がりました。

勿論それには各新聞社が、筆を揃へて、大袈裟に書き立てたからでもあります。その日の午後一時から講演會が始まるといふのに、會場には午前中から聴衆が押寄せ、正午には立錐の餘地なき迄に到りましたが、尙押かけて来る聴衆の整理に警察當局は、大童の状態で、彌が上にも人氣をわき立てるのでございました。

直代の心境はさうした會場の騒しさに引かへて、森林に座した様な静けさで、一人與へられた居間で午前中は讀書などをして時間を費しましたが、少し早目に晝食を與へられると、署長夫人静子に進められて、洗面をすまし、髪を結び上げると、いつの間持つて来たのか、眞新しい包紙に包んだ小袖が置かれてあります。

「奥様、それは何でございますの？」
と何心なく直代が尋ねると、

「里見さん、今日は貴女に、このお召物を着て頂かなければなりません。」

直代は呆れて、

「まあ奥様、それは小袖ではございませんの？」

「はいさやうでございます。」

今日は貴女に、是非この小袖を召して、講演をして頂かなければなりません。」

「まあ、奥様、

華やかな演奏會ではございませんのに、小袖を着なければならぬなんてことはないぞ存じますわ。

出来ればこのまゝでと思つて居りましたのに。」

「あら、それはいけませんの。」

何でも彼でも、この小袖を着て頂かなければ、講演をして頂けないと申しますので……。」

「まあ、それでは私が、餘り長い間、仙人の様な生活をして、顔形が殺風景になつてゐますので、聴衆に冷い感じでも與へて、失敗するごいけなから幾分でも和やかな氣持を、聴衆へ與へる様にこの御心盡しから、こんな立派な小袖を御新調下さいましたのでせうか。」

「飛んでもない。絶対にそんな譯じやございませんの、

實はこのお小袖は、貴女の御實家の御兩親様から、送つて來ましたのでございますの。」

直代の顔は見る／＼變つて、

「まあ、里の兩親からでございますつて？」

と早速手に取つて開いて見ると、黒縮緬に派手な据模様をついた小袖で、三つ柏の五つ紋がはつきりついてゐます。

直代は餘りの懐しさに、胸が迫つて、直ぐには言葉も出ませんでした。

暫くして、

「ごうして兩親から、こんな着物を送つて呉れましたでせう。」

「不思議にお思ひになるのは御尤もでございますけれど、貴女が此處へお出でになつてから、すぐ御通知しましたので、御兩親様始め皆様が、大變お喜びになつて、

この世にはもう亡き者と、諦めてお出でになつた貴女が、生き返つた様に思召して大變お喜びで、すぐにも出てお出でになりさうな御様子でしたが、態と主人から、色々の事情があるから、この講演がすむ迄は、親子兄弟の名乗りを待つて頂き度いと、手紙でお願い致しましたので、その代りにこのお小袖をお送り下さいましたのです。

これは貴女の若い日に、お嫁入りなさる時、お着せしやうと、丹念こめてお作りになつた慈愛の籠つたお小袖ださうですが、不思議な事から、貴女が家出をなすつて人の道の修行のために、幾年かの間旅へ出て、年をお過しになりましたので、御兩

親の折角のお楽しみも、果敢ない夢となりましたので、毎年夏の蟲干にこの小袖を出す度に、泣いて年を數へてお出でになつたのださうです。

今度貴女の念願が叶つて、廣い世の人の爲に、幸福な道を拓くための、門出の晴衣に是非役立たせて呉れど、慈愛の進る様なお手紙と共に送つて参りました。

主人は之を見て泣かれました。

じみも派手も問題じゃない。

これ程意味の籠つた尊い講演服はない。

是非お着せ申す様にと申付けて出て参りました。

主人の顔をお立て下さるといふ意味ではなく、尊いこの親御様の慈愛の真心の籠つた着物をお召しになつて、無限な親神様からお授かりになつた萬壽華を、満場の聴衆に香らせて下さるのみでなく、集られなかつた縣下の總べての人の心にも、香らせて上げて下さいませ。」

静子夫人は、自分の言つた言葉に感激して、すゝり泣いてゐます。

直代もその温い心より尙深い、故里の父母の情が、今更の様に身に浸みて嬉しく、

「さやうでございますか。」

そんな事とは存じませんでした。

父や母の温い真心を受けて、喜んで着させて頂きます。」

と押戴きました。

そして夫人や女中に手傳つて貰つて、

白の下着と黒の上着を重ねて、きちんとして着て、派手な絲錦の丸帯を締めて貰ふと、

何とも言ひ様の無い程、上品な令嬢姿に出来上りましたので、夫人や女中は後に廻り

前に廻りして見て、

「何てまあお美しい、

まるでお人が變つた様でございますわ。」

「神々しくゐらつしやいますことはどうでせう。」

悟つてはゐても、流石は女性です。

幾分羞んで、うつむき加減になるのを、静子夫人は、

「まあ、一度御覧なさいませ。」

と姿見の前に無理に押しして行くので、直代はちらと鏡に映つた自分の姿を見て、

「いゝえ。結構でございますの。」

と辭退した時、自動車が出来て表に止ると、高木署長は、満面に溢れる程の笑を湛へて入つて來ると、

「やあ、お支度が出来ましたか。」

これは素敵だ。お立派ですね。

矢張りさういふ風にお作りになると、日本婦人の典型と申上げ度い様な、品性人格がはつきり現れて參りますよ。

會場はもう大變な人氣で、立錐の餘地もありません。

今日の講演は、非常な期待を以て、聴衆が待つてゐます。

それにこの間貴女は、男か女か一寸見分けのつかない様な風態でゐられたのですから、今日はごんな風にお立ちになるのかと、非常に好奇心を持つてゐますから、かうした御服装でゐらしたら、聴衆は吃驚して、

「あつ！」

と言つてたまげるとせう。

全く痛快ですよ。」

と膝を叩いて喜ばれますので、静子夫人も笑ひ乍ら、

「貴方のそのお喜びになりやうつたらございませんわ。」

「だつて當り前じやないかい。」

お前も一緒に行くんだらう。

大した人気だよ。

里見さんが、人の世のために、幸福な社會を建設するための、第一歩の處女講演なのだ。

第一歩を誤れば千里を迷ふのだ。

今日のスタートが一番大切なんだ。

お前も成功をお祈りせい。

武夫も富美子もお花も、一心にお祈りするんだよ。」

「まあお父様つたら、氣狂ひ見度いですわ。」

「本當に面白いお父さんだよ。」

「旦那様、大變なお元氣でございますこと。」

署長はうち中を喜び廻つて、静子夫人も共に直代を自動車に乗せて、公會堂へ急ぎました。

壇上の華

莊嚴な公會堂の正面には、大きな紙に、演題が掲げてあります。

その文字は

神の榮光と人の道

講演者 里見直代嬢

聴衆は早や待兼ねて、折々嵐の様な拍手を送つて待つてゐます。

聽て正面の時計が正一時を指すと、悠然として正面の壇上に立つたのは、温厚なる人格と、敏速なる手腕を以て知られた高木署長その人でありました。

嵐の様な拍手が漸く止むと、満面に笑みを湛え、輝く様な瞳で満場をくるりと見廻して一息入れると、はつきりした鏗のある聲で、

「満場の諸君

この度警察署が主催といふ、曾て例のない、この講演會を開催する事になりました所、諸君には御多忙な中を繰合せて、かく多數御來場下さいました事を、深く感謝致しますと共に、

尙幾千に餘る聴衆が、同様今日の講演を聞くべく、お出で下さいましたが、定員の定つて居りますこの會場へ、御入場を願ふ事が出来ず、御案内申上げました時間前に御出で下さいましたにも拘らず、御入場をお断りする事を餘儀なく致しました事を深くお詫び申上げます。

皆様からもその點惡しからずさうした皆様方に御詫びをお傳へ頂き度いと存じます。今日演壇に立たれて、講演されますのは、從來幾度もこの壇上にお立ちになつて、諸君にお呼びかけになつた、教育家又は政治宗教家としての道に身を委ねてお出でになる、その道の權威者ではありません。

今日迄はその人の存在さえも、世の何人と雖も知る人さえなかつた、社會から見れ

ば、無名のしかも年若い一婦人でありますが、この里見さんといふお嬢さんは、幼い頃不思議な因縁から、世に言ふ神穩しに逢つたと言ふ様な風で、高い人も餘り登らない様な山に登つて、神の社に遊んで、神に親しむ間に、不思議な天女に誘はれて、神の國に行かれたといふ、素晴らしい花やかな夢を見られました。

そして直接大神様から、現實の世と形なき神の世界との關係に就て、詳かに御神諭を受けられました。世の人の生活を、今日の様に惱ましく住み難い暗いものでなく本當に明るく朗らかで、住みよい社會を造るために、地上の總べての物を神靈が祝福されて幸福になれるといふ、神の御靈である、萬壽華といふ美しい花の咲いて、非常によい匂ひのする一枝の花を授けられたと思ふと目が覺められました。

それがためにその時から、魂が生代つて、今迄は何となく憂鬱で、世の中の一切の事に疑問を持つて、その説き明しを受ける事の出来ないのを苦しんでゐられたのが、この夢を見られてから、一切地上萬物の現存する理由と、宇宙大自然の形なく

して、生ける親神様の、限りなき榮光をはつきり知つてから、常に形は地上におき乍ら、心は天に通つて、限りなき榮光を心身に受けて居られました。

所が長せられるに従つて自分の人として生れて来た使命が、如何に重大であるかといふ事に氣付かれました、社會と人類のために、神の福祉を傳へるために、覺悟を定めて、女學校を卒業して、一先づ家へ歸られた所、世の常の親心に變りはありません。

御両親は里見嬢を一日も早く良縁を求めて嫁がせ度いと願つて居られました。

幾所か望まれる良縁ある中で、特に双方の御両親が諒解出來て、目出度く結婚式が取結ばれるであらうと噂される最中、直代嬢は忽然として姿を消されたのであります。以來嬢は、きらびやかな都の花にあこがれて、さまよふのではなく、身には見る影もなきぼろを纏ひ、素足に草鞋といふ扮装で、七年といふ長い間、北は北海道から南は九州の果まで、悉くの神社佛閣を巡つて、専ら精神界の聖賢を訪ねて、その道

を求められました。

七年と一口に言へば、何でもありませんが、その間の七星霜は、實に苦心慘憺たるものであつた事は申す迄もありません。

その間神社佛閣に宿つて、雨露を凌がれた事もあるさうですが、多くは木の根を枕とし、落葉を衾として眠られた夜が多かつたのであります。

かくして木の根草の實を食として、若き日のうるはしかるべき自己を殺して、只管に人の道のために、妙法を捜し求められました。

その念力が天に通じましたものか、この那智山の瀧に淨身された刹那、不可思議な奇蹟が現れて御本人の魂に、確然たる神の靈力が宿り、地上に生きる人の子にして心身の悩みを受けて苦しむ者の悩みを、取り除く事が出来るといふ、神秘不可思議な靈光を持たれる様になつたのであります。

過日那智山に於て、嬢が神から受けた靈光を試された事に依つて、非常なセンセイ

シヨンを捲き起した事は、諸君も既に御承知でせう。

初めは私達も、人の心を惑はす怪行者として、その正體を突き止め、處分する覺悟で、本署に伴れて參つたのでありますが、段々取り調べて見ますと、絶對に審しき行爲を、敢てする様な怪行者でもなく、眞に眞心から神に歸依して念ずる力に依つて、發揮する靈力に依つて、心と體を悩む病者の苦惱を取り除く實際の力ある事が實際の試しに依つて判然と分つた次第であります。

今や我が國は、内外の非常時に直面し、百般の國難は、前途に横たはつて居ります。之を打開するものは、我等日本國民總べての、正しくして強き、魂の力でなくて何でありませう。

科學萬能となつて、いよ／＼智能犯が増加し、醫學が進歩して、病者が全國に溢るゝといふ今日、學問の正體何物ぞ。

醫學とはそも／＼何ぞや。

と叫ばざるを得ない状態となりました。今や内外の狀勢は、何時如何なる時に、峻惡なる風雲襲來するやも計られません。この國家の非常時に當り、我々國民の負ふべき責任益々加重される時、かゝる不可思議なる靈力を得て、世に現れたる里見嬢こそ、實に神の表現として、迎へるべき人であると思ひます。

嬢のお話は神の榮光と人の道といふ事でございます。諄々と無限から有限世界へ説き起し説き去つて、皆様に眞の神の姿をお目に向け、神の聲として御話しになる事と思ひますから、私は唯單に嬢の經歷を御紹介するに止めておきますけれども、唯一言最後に附加へて申上げておき度いのは、今此處へ現れまする里見嬢は、實に目のさめる様な、華やかな小袖を着て居られます。

髪さえ高島田に結つて居られたなら、花嫁姿そのまゝであります。

何故嬢がかうした姿をして此處に立たれるかといふ事に就ては、實に涙ぐましい物語りがあるのでございます。

里見嬢が十八才の時、兩親の定めやうとした良縁を外所に、忝として家を去られましてから、御兩親は雨の夜も風の夜も、嬢の事を忘れられた事はありません。嬢のために作られた、お嫁入りに着せるべく調へた、衣裳を眺めては、陰膳を供へつゝ、嬢の無事に歸られる事を祈られたのであります。

いよ／＼この度念願が叶つて、人の世のため、神の世の榮光を説き明される、第一歩である、本講演が開かれる事を、私から通知致しました所、御兩親は、雀躍りして喜ばれて、その日その時こそ、形は變れ、愛しき我が子の一生一度の晴の場所であるから、似合ふ似合はぬに拘らず、この小袖を着せて欲しいと送つて寄越された實に慈悲の寵つた愛の小袖であります。

嬢がこの華やかな、肉身の親から與へられた愛の小袖を纏はれ、その上の無限なる神より恵まれたる、大愛大悲の萬壽華を、その心に抱かれてお立ちになった時、必ずや満場の諸君のみならず、場外に溢るゝ諸君の心身に持たれる苦惱は悉く取り除

かれて、神の榮光は永遠に、諸君の心身に輝き満たされるであらう事を信じて疑ひません。

何卒右の事情お含みの上、花々しき嬢の門出を祝福してお迎へ下さらん事を、主催者として、一言御挨拶申し上げます。

署長は自分の言葉に感激して涙ぐんでゐます。

聴衆の目にも涙が溢れてゐます。

降壇する署長の後から、浴せかけられる拍手の嵐は、何時止むとも知れませんが、

聴衆の拍手の鳴りを鎮めるのを待つて、壇上に姿を現したのは、目ざめる様な盛装を凝した直代でした。

高木署長の紹介で、豫想はしてゐ乍ら、數日前の那智山の、女怪行者として騒がれたといふ事は、ごんな女性かと、半ばは好奇心に驅られて集つた聴衆の目にも、餘り

にも想像ごかけ離れて、壇上の華ごも思はれる程の、花やかな容姿に氣を吞まれて、暫し呆然として、嵐の様な歓迎の拍手が鳴り出したのは、その一瞬を経た後でございました。

壇上に立つた直代は、群衆の何千といふ目にも、嵐の様な拍手にも、別段衝動を受けたらしい様子もなく、泰然として壇上に直立したまゝ、聴衆の拍手ごはめきの納まるのを待つてゐました。

聴て場内が鎮まると、涼しい目をばつちりと睦つて、場内を隈なく微笑を湛えて見廻してから、静かに一禮をしました。

聴衆は固唾を呑んで、この瞬間に不可思議な、この女性の最初の一聲を聴くべく、彌が上にも緊張して、壇上の直代に目を注ぎました。

大宇宙ご地球

壇上の直代は、静かにく瞋目數分にして、再び眼を開いた時は、今迄ごはまるで別人に變つたかと思ふ程、嚴肅莊嚴これ正に華の精かと思ふ程、その態度顔色目の輝きは變つて來ました。

そして幾千の聴衆の、待ちに待つた一聲は、その紅い唇から迸り初めました。

「私が只今高木署長様から、御紹介を頂きました、里見直代でございます。

野邊に咲く粗末な草花にも劣る様な、眞に價値ない女性でございますが、地上萬物のために平等なる大愛を以て、お慈しみ賜ります大神様の御恩寵に依りまして、不可思議な御因縁を結ばせて頂きました、

今日茲に親しく、皆様方の尊き温き眞心に近づけて頂きました、神様の御心を、

お傳へさせて頂く事の出来たを、限りなく光榮に存じまして、深く感謝致します。只今から申述べ度いと存じます事は、一女性として、無知無能なる私といふもの、意志といふものは、塵程もございません。

天から與へられました、唯一の眞心を、淨め清めて、神に念じ、神様の御神授のみの尊き御言葉を、嚴肅な心持で、お取次ぎを致し度いと存じます。

一般聴衆の方々にも、よろしくこの信念を御了承の上、御聴取り下さいます様に御願ひ申上げます。

人の心に常に持つて居ります、大きな疑問を解決するために、次のお話を致します。心ある人は、誰にしても、萬古不變なる地球と、それに附随してある、萬物の存在を見る時、何時の日に如何なる神が現れて、かゝる神秘不可思議なる、大自然界を作つたのかといふ、疑問の起るのは、當然の事であります。

現代の如く人智學力進み、科學萬能を唱ふる時代となりましても、人智の力に依る科學に依つて、靈を以て肉體諸器官を、自由に活動せしめ得る人間を造る事は出来ません。

そののみか、地上に現存する、土の一掴み、一掬の海水、僅少の空氣たりとも、人智科學の力に依つて分析し、その形を變化せしめ得ることも、之を作り又は之を消滅し盡す事は、絶対に出来ないであります。

まして、空の太陽、月、星の世界に存在に對して、人智に依つて、その本體を見究めんとする研究は、成し得ますとも、總べて地上及び、宇宙に存在するもの、本質の由來根源を究め知る事は、古今東西に例しなく、尙幾億年の後に於ても、神秘はそのまゝに、嚴然として、存續するものと存じます。

この嚴然たる地球上萬物の、神秘的な存在を知る時、誰か人にして、地上のもの、塵一つ、一滴の水と雖も、我が物と斷言し得るものがありますか。

地球上に萬物の生命あり、宇宙に輝く太陽、水、空氣共に相和して、物皆生きんと

して生きてゐるのであります。

地球は一瞬の遅速もなく、大宇宙に廻轉して狂ひなく、又止む時もありません。

かゝる神秘不可思議な法則は、如何なる太古に溯つても、人に依つて定められた事なく、實に尊き神の御心に依つて、定められた大自然の法則でございませう。

この神秘不可思議な、地球萬物を生み給ひ、萬古不滅の大法則を定め給うたのは、實に大宇宙の大靈であらせられます、天御中主大神様でございませう。

宇宙の大靈は、廣大無邊なる、御神力に依つて、形ある三千世界と地上萬物を生み給うて、之等總べての生命を祝福し、うるはさんがために、永遠不滅なる、大自然の法則を立て給ひ、御親ら大靈は、その大悲大愛の御力を、地上に充たして、生み育て養ふことを、忘れ給うた事はありません。

人の肉眼に依りて見ゆる、萬物の形は、肉眼で見ること出来ない、大宇宙の大靈より、生れ出たものでありますために、大宇宙の大靈は、親であり地上萬物は子であ

ります。

學理の力では、絶対に探り知る事の出来ない、無限なる大宇宙の力が、即ち神であります。

之を第一に知る事が、人生の道を明るくするはしく正しくする基であります。

祖神と日本

三千世界と地上萬物を、生み養ひ給ふために、萬古不滅の大自然の法則を定め給うて、御親ら三千世界に輝き、萬物をうるほし給ふは、宇宙の大靈に在します、天御中主神でございませう。

この大靈は、世界人類のみならず、萬物の親様でございませうが、この神の大靈から生れ出で給ふた、界女二柱の大神、伊諾那岐、伊諾那美の大神様は、靈體共に根本質

を異に分たれて、男性として、心身共に剛健に現れ給うた、伊諾那岐神は、陽の性を
受け給ひ、柔和温情の質を受けて現はれ給うた伊諾那美の神は、陰性にして、女性に
在しますのでございます。

この二柱の神が、宇宙に現れましたために、その御心力に依り、宇宙地球上にある
すべての者皆が、陽性と陰性に別れ、これが圓滿に相和し相交つて、正しく活動する
といふ、大自然の法則も、最大より最小の極致迄、判然と定つたのでありまして、人
智科學の力は、之を巧みに取扱ふの、權能は與へられてゐますけれど、大自然の法則
に對しては、一指も觸れる事の出来ない、神秘的な法則は、唯宇宙の大靈の神に依つ
て、現はされ給ふた、二柱の大神の御業に依るものであります。

この大真理の二柱の大神は、御親ら大海原に天降りまして、日本の國土を作り
生み出し給ひ、之を淨め給ふて、神生みの國と定めて、みしるしを印して宇宙へ御昇
天なし給ひ、宇宙の大靈の靈光を受け給うて、畏くも

日の神天照皇大神を生み給うたのでございます。

日の神は御祖の神の御神意を受け給うて、高天原に移り給うて、地上人類福祉の道を
開くために、人類に與ふべき、眞の眞心と、衣食住の種を、生み養ひ給ひ、神の御天
業御成就の日に、天孫瓊々杵尊を召し給ひ、三種の神寶を授け給うて、御手づから生
み成し給ふ、衣食住の種つ物をも授け給うて、

「豊葦原瑞穂國は我が子孫の君たるべき地なり、
汝皇孫往いて治めよ。寶祚の榮えまさんこと、天壤と共に窮りなかるべし。」

以上の畏き御神勅を下し給うて、親神様の生み清めおき給ひし、日の本の國に、降
し給うたのであります。

畏くも三種の神寶の八坂匂の曲玉は、大宇宙大靈の、神の愛の表現、八咫鏡は宇宙
大真理の表現にして、正義の御靈として、世界萬物遍照のお力をこめさせられた、神
靈であります。

天叢雲の御劍は、地上の悪魔を取り除き、又は消滅せしめて、神の御心に依る、大悲大愛を、地上萬物の生命の上にうるほし、神の世界の如くに、正しく明るく朗らかな、幸満ち溢る、地上世界に造り改めんがための、神靈であります。

地上に強硬なる悪魔が存在して、天意に背き、地上人類萬物のために、殘酷の限りを盡し、人類の心と肉を禍して、苦しめ惱ませ、又自我といふ煩惱心にその心を誘惑して之がために人類同志が、互に争ひ憎み、偽り貪り、傷つけ合ふといふ事がなかつたならば、この御神靈を下し給ふ、必要はなかつたのであります。

その昔宇宙の大靈が、國生みの御業を行はせ給ふ時に、如何なる神の御試しの爲にか、神の無限なる大悲大愛の御威靈に對しても、絶えず反抗して、神の御心と、人の心とを遮つて、光なく輝きなく、幸なき暗黒の世界に陥れて、苦しめ惱ませる事のみを、本領とする、悪魔が現れて、地球上に所定めず暗躍して禍してゐるのであります。

それがため、大宇宙の大靈天御中を大神様が之を嘆き給うて、天照皇大神の御神靈を経て、天孫に傳へ給うたのであります。

之即ち大宇宙の神靈である、無限武力の表現靈でございませぬ。

かくも尊き御神靈をお受けになつて、天孫は世界の何れへも降り給はず、祖神のお示しの如く、神國日本へ天降りましまして、茲に國つ神としての御神威を、發揮し給うたのでございませぬ。

國體の精華

地球上に國は多く、人類は幾億ありと申しましても、神の御手に依つて、御統制を受けてゐる國なく、民族もありませぬ。

然るに、我が日本神國は、大宇宙の大靈たる、神の威靈を受け給う祖神天照皇大神

の御神意に依り、神ながらの天孫が天降りましまして、天の御柱としての、國の基を築き給うたのであります。

その昔高天原の祖神に仕へ奉り、誠一筋の神道を守つて、各々神より與へ給うた、天職を守り盡して、神の御天業を翼賛し奉りました、男女兩性に岐れたる、八百萬の神々は、天孫降臨の時、祖神の御神意を受け、天孫を守り奉つて、日本國に降りましました。そして諸共に地の神となられまして、土民族と相和し、一天萬乗の神君の御天業を翼賛し奉りました。

以來子々孫々までも、神を敬ひ祖先を尊び、至誠一貫君國を守護致されました。徳を治め業を勵んで、地上人類の福祉開發のために、君臣一體となつて、皇國隆昌のために努力されました事は、畏くも

明治天皇の教育勅語に、宣はせ給うた通りでございませう。

今眞の神の御心を悟らざる、世界人のみならず、日本人の中にも、日本國を小さき

東洋の一存在と見、祖神大神様を、日本民族のみの大祖先の如く考へ、甚だしきは、天祖に對し奉り、批判を加へるが如き言動あるは、天意を知らざるも甚だしきものでありまして、天照大神様は、我が日本國のみの大祖先にて在しますのみでなく、實に世界人類の親神様でございませう。然らば

何故に大神様が、天孫の降臨の地を、日本に定め給うたかと申しますと、宇宙大眞理の親神様の御心に依りて、生み出し清め給ひし、約束の國であるがためでございませう。

實に御心意は、この國を宇宙の大靈と相和する、大悲大愛滿つる、世界遍照の源の國として、世界總べての人類萬物の生命を、祝福せんがために、かゝる御業は現はし給うたのでございませう。

故に神國日本にある神の民族と致しましては、祖神天御中主神及び天照皇大神様に對して捧げ奉る、大信仰的信念を他所にしては、如何なる世界にも仰ぎ信すべき神の

ある理由はないのでありまして、實に日本は、世界宗教の源であり、世界人類福祉の源泉であります。

故に我が日本神國には世界各國の如く、政黨派もなく、又軍閥等の存する道理は絶對になく、政治は一天萬乘の、聖天子の大悲大愛の御心を、萬民福祉のために行はせられる大權でございすために、大君の大權を翼賛し奉る人々は、唯身に持てる眞心を捧げて、一點の自我もなく、唯天地の神明に照して、明らかなる道を行ふべきが當然であります。

政治即ち八坂匂曲玉の御神靈の表現にして、軍隊は天叢雲劍に籠らせ給ふ、無限なる神の武力にあらせ給ふが故に、日本軍を稱して、「神軍」又は、「皇軍」と言はれるのも、當然の事でありませう。

皇軍は地上の惡魔を取り除き之を消滅して、あらゆる地上人類萬物のために、眞の福祉を得させる事を使命と致しますがために、故なくして、他の利益を侵略するがた

めに軍を進めるといふ事はないのでありまして、神國日本の武力は、惡魔を天に代つて、根本的に消滅するの威力は、無限に天から與へられますけれども、正しき者の生命を保護するといふ、道義を寸時も失つてはなりません。

この信念こそ、眞の日本民族に天が與へ給うた、世界遍照の御天業を翼賛すべき日本精神の眞髓である、即ちこれが大和魂でございす。

神と政治

只今から一般國家社會で行はれて居ります、各般の組織並に制度に就て、宇宙自然界の法則と相照しまして、神様の御旨にあらせ給ふ點と、眞理に背いて居ります事に就きまして、お話をさせて頂きます。

第一に政治に就て申上げて見度いと存じます。

神の國日本には、大宇宙の神から、眞理を御眞髓として、地上に現はれ給ふ、一天萬乗の聖天子が在しまして、地上萬民上下の隔たりなく、總べてを赤子と慈しみ給うて、その國民の誠からなる幸福を、只管御念願下さるのであります。

その有りがたき御聖慮を、洽く萬民の生活の上に、うるほされんがために、御親裁賜りますのが、諸般の政治でございます。

この政治が陛下の御聖慮そのまゝ、一點の曇りなく、鏡の如くにして、誠一筋の力畏くも八坂句曲玉、八咫鏡そのまゝが、政治となつて現はれるのでございます。

ために御聖慮のまゝの御光りが、そのまゝ、こだはりもなく、萬民の日々の生活の上にいるほされますならば、實に日本神國民族の、繁榮幸福は、天國同様に祝福さるべきものであるのでございます。

それが、今日の如く人智科學が進歩して、地上、空中、海上、地下、海底に到る迄も、形式文化の華は、満開致しました時に、いよく國家國民の心身に悩みが重くな

りました。

思想經濟の、行詰りを見、諸外國とも亦重大な關係に立到つて、國難非常時といふ一大難關に直面して、凡そ今日程國家の將來のために、重大な事情に立到つた事は、過去の歴史にも見ざる所でございます。

外國に對する關係は、半ば不可抗力な事情にありますから、これは天意として、大いなる神の導きに從つて、世界平和を最後の眼目として、進まなければなりませんから、これは別にしてお話を申上げる事にして、國內に於ける難局事情に迫られてゐる、現在の状態の、依つて來つた原因と、之が眞の改善方法に就て、申上げます。

神國日本の國民政治は諸外國と、國體の根理由來が異なるために、日本獨特の組織制度に依るものにして、總べて皆眞理に依つてのみ、實施さるべきものであります。それが明治の初年に開港と同時に、歐米の文化を尊び、之を學んで急足に日本に取り入れました。

それと共に、政治もその組織諸制度を、歐米に學び、國民の總意を入れて、希望を満足せしむる爲にといふ、理想論から、議會政治といふものに改めて、全國各地方から選出されました代議士が、政治に參與する事になりました。

この組織は、正しく誠一筋の、信念に依つて、各代議士が、陛下の御聖慮を體し、萬民の幸福のために、身命を捧げて報ゆる、至誠一貫の信念に依る、大精神を以て、更によりよき政治を建築して、國家社會をうるはすのであれば誠にそれは聖なるものであります、過去に於ける日本の政治家は、この精神に依つて、至誠一貫政治家としての重責を、完うした方々も多數ありますから、全體だと申す事は出来ませんが、その中の大多數の方々は、黨派といふものを組織致しまして、その黨派精神に強くこだはりまして、政治の大理想である、萬民の福祉といふ事は、唯自己の責任上、又體面上から、口に唱へ文字に書くのみで、之に對して、眞心からの信念を打込む事はせず、常に心は黨利黨略に専念し、政黨の力の中に潛み込んで、

自分の名譽、地位、財力を、掌握せんとする、慾望が心の中に滿々として、時の政府の政策が、如何に國家國民のために、適切且重要な施設であつても、反對黨の政策であれば、その内容如何に拘らず、之に對して強硬な排撃運動を起し、又時の内閣を瓦解せしめる事のみ、努めて來たのが、事實でございます。

この態度は皆、歐米から學んだもので、日本古來の政治組織では、絶對にございませぬ。

それが最近では、本家の歐米を遙かに凌ぐ程、政黨色が濃厚になりました、上は貴族院から、下は些やかな一小農村迄も、忌はしき政黨色が染りまして、眞の政治に非ざる、曖昧な政治思想を、普及されてゐますために、四年目毎に行はれる總選舉は勿論、臨時解散の時に行はれる代議士の選舉の場合にも、眞理に立脚致しますれば、候補者たるものは、代議士たるに充分なる、學識智能を有するのみでなく、常に純正なる國體觀念と、確固たる品性人格を備へたる、完全な人物であるのは當然であります。

然るに最近では、國家の代議士となるべき智能學才等の乏しきのみならず、國家觀念等は、實に薄弱にして、品性人格等に於て、尊敬すべき一點の長所も持たないものが唯何等かの手段方法で、金力のみ擱んでゐるといふ事のために、一つの野心か又は名譽心を満足させるために、自ら事實とは遙かかけ離れた如き、虚偽の經歷を並べるのみか、他の人の述べ又書いた意見等をそのまゝ、我が物顔に吹聴して、當選せんがために、あらゆる手段を講じて、民衆を欺きます。

それのみか、嚴重に禁じられてゐる事であり、又その度に嚴格に、その筋の手に依つて、取締られてゐるにも拘らず、その法律の網を、巧みに潜行して、投票権を買収するといふ如き、怖るべき不正行爲を堂々として、青天白日の下に行つて、その力に依つて、當選して代議士となる者が、殆ど大多數を占めてゐると聞く時、政治家として芽生えた第一歩から、自己を偽り、長くも御聖慮に背き奉り、國民を愚弄して、大權に背かしめ、法律を蹂躪する事を、罪と氣付かず、自己を侮辱するものとして、

上陛下と神に畏れざる、非國民が政治家となつて、何を成すのか、眞と正しさの上立たない政治に、眞理の打込まれやう道理はございません。

之に依つて、百般處世上に矛盾の起つて來る事は、當然でございませぬ。

今日の國民は、自覺と共に政治家を深く信頼するといふ傾向が薄くなりまして、従つて國政に期待する國民が、次第に少なくなつて參りました。

爲に近時は次第に政治家の威力は地に墜ちて、その影は淋しいものになりました。之誰の罪でもなく、皆自ら穿つた、邪の道に行詰つた形であります。

今後國家の行詰れる諸制度を、眞理の常道に、改革して綱紀を宇内に輝かし、國威を海外に發揮せしめやうと致しますのには、政治家が先づ第一に自覺反省して、自ら省みて恥を知る者は皆、闕下にその不忠を謝し奉り、國民に對する重々の罪を謝して身を退いて謹慎すべきであります。

如何に代議士が相寄り相集り、口に理想論を説き、書類に書き連ねて、法律として

御裁可を仰ぎ、之を治く國民に普及しやうと努めましても、教育を始め、宗教、實業、農業、工業あらゆる方面の諸機關及び、教化社會教育事業に於ても、一天萬乗の陛下の御聖慮が、そのまゝ國民の生活の心身に融け込んで、うるほされる様にあるべきでございませぬのに、その中間にありまして、陛下の大權を翼賛し奉ります所の政治家が、自ら不正、欺満、怠慢、強慢、虚榮、黨利黨略等、あらゆる感情手段で、この御大權を犯しますために、太陽が雲に蔽はれた如くになりまして、絶大無限なる陛下の、赤子へ對する大悲大愛の御仁政は、洩るゝ所なく民衆に及ぼす事は出来ませぬ。

教育宗教その他の諸制度に、眞理が行はれないのは、皆之政治家のなせるわざでございませぬ。

君國の今日の、重大な行詰りを開拓するためには、その源の毒素である、不正不純な政治家を消滅せしむるといふ事以外には、求めても道はないのであります。

日本全國の民衆悉くが、この根本問題に心眼が届かなかつたら、君國の將來は、遂に滅亡の外はございませぬまい。

この點私には、大神様の深く厚き御神意として、總べての同胞に訴へる所以であります。

神と教育

次に我が國の教育に就て、お話をさせて頂きます。

教育と申します事は、まだ分つてゐない者に新しい智識を教へて、之を導いて行くといふ事でございますから、ごの様な社會にも、教育は常に行はれて、ゐるのでございますが、學校教育は、特に一つの純然たる主義と、方法に依つて、嚴格に行はれてゐるものでございまして、しかも之は社會の安寧秩序に、大きな力を及ぼすといふのみでなく、常に國家の隆昌を助けたり、又その基礎を軟弱にしたりする様な、重大な

力を持つてゐるものでございますから、學校教育に當る教育者又父兄も、教育を受ける子女も、よく／＼教育の目的を誤らない様に、強き意志と、確固不拔な、國民的信念を以て當らなければなりません。

政治家の責任、信念に就て申しました様に、教育も亦同様であります。

神國日本は、世界に類例のない、全く獨特の神の生み給うた國でありまして、神ながらの萬世一系の聖上陛下を、天の御柱として、又國民の大宗家として、仰ぎ奉り、國民は八百萬の神の、支流でありまして、祖神の血を受けついで現れた、現し神であります。

爲に我が國に於ては、陛下は下萬民を赤子として慈しみ給ひ、萬民は陛下を、父母として敬ひ奉る所の、君臣一體唯至誠を以て、築かれた所の君主國でございます。爲に、我が國の國民教育は、神を限りなく敬ひ、君を尊び、父母によく仕へ、夫婦兄弟相信じ相親しみ、共に一般同胞が共存共榮の生活を營む事が、一番大切な國民生活

活の常道であります。

故に明治天皇は、教育勅語を以て、國民の進むべき總べての道を、示し給うたのでございます。

この確固たる國民精神の觀念を、先づはつきりその精神に植えて、それをうるはしく、芽生えさせつゝ、時代に必要な智識技能といふものを、完全にその能力に消化し得るだけの分度を、鹽梅よく植えて、國體觀念の精神と融合せしめて、直ちに純真なよき芽と伸び、花と咲き實となる様に、順序よく培つておかなければなりません。

それが過去數十年間の我が國の教育は、概ねその方針を取り違へた感があります。明治の初年から、既に外國の文明文化を禮讚し、その内容も充分詮議する事もなく様々な學術技藝、器械、藥品、書籍等を、そのまゝ直輸入して、日本の大小あらゆる教育機關に、之を應用致しました。

故に傳統的に子女の腦裡の訓練がしてない所へ、外國の新しい器械學科等を無理に植えつけやうと致しまするために、無理があります。

又科目が餘りに多過ぎるために、充分に之を記憶力に消化して、精神に確固たる信念として受入れる事が出来ませんので、極めて淺薄なしかも曖昧な、幻の様な智能で理窟だけ分つてゐても、實際には何等の力も發揮し、應用する事も出来ない様な、淺薄な智識を涵養する事しか出来なくなりました。

それと同時に餘りに學校が澤山出来過ぎましたために、之に當る教育者の濫造を國家は敢て致しました。

教育といふからは、教育者は藝術家とは違ひますから、如何なる場合でも、その身の實踐躬行の品性人格が、生徒の教育に、悉く反映して行くものであります。

人を教ふる道に立つ教育者は、飽迄品性人格が清麗で、聖賢君子の徳を備へて、何時の場合も、子弟に接する時は、親父慈母の恩愛を以て接し、真心から溢れ出づる徳

と智を、その教へ子の肉と魂に注ぎ込まなければなりません。

それでなければ、眞の品性人格智識道德の、圓滿なる日本國民は出来るものではありません。

然るに過去數十年間の、日本の教育者の採つて來られた態度を見ますのに、祖先の精神的系統をも調べず、家庭の狀況をも多く考慮せず、唯その多くは、本人の能力の優秀を條件として、之を選抜致しまして、専ら智能教育に重きを置いて、人格教育殊に、國體觀念の大精神を基礎とする、重大な力を養ふ事を、第二としておりましたために、多くの教育者の中に、神聖なる教育者としての天職を、普通世にある藝術家又は労働者と等しく、職業意識を持つ者が多くなりましたして、受持時間多いことに不満を抱き、待遇に不平を抱いて、教育者として、重要な責任觀念を、ゆるがせにする者も少くありません。

殊に神聖なる教壇に立つては、生徒に「君に忠義、親に孝行、夫婦睦じく、人には

親切に、總べては正直を以て基とせよ。」

とよき事をのみ眞面目で教へますために、純眞な生徒は、先生を神の如く信じ、敬つて、深く尊敬します。

けれどもその先生が、學校以外にある時、酒を飲み、不純な巷に出入りして、遊興する様を見たり、親に不幸であつたり、家庭が不和であり、親戚や他の人との間に、不人情な行ひ等がありましたりする事實を、目の邊り見、又聞いた時に、全くその信頼は、覆されて、反對に輕蔑侮蔑の目を以て見られました時に、先生と生徒の間には、唯智能的技術の授業だけが残されて、それを固く守つて、正しく強く、眞實の人格的實力となつて、世の中に役立たせるといふ力は、附隨してゐません。

爲に「先生は骨と皮にて造り、物を教へる器なり」といふ、叫び聲迄上げられて、器械と同様に見做される様な、教育者も多數世の中に現はれて來た事實を、見逃す事は出来ません。

そのみではなく、自己の地位職業を利用して、却つて日本國民に、絶對あるまじき外國の主義思想等を普及して、國家の基礎を覆す様な教育を、行ふ様な怖るべき教育者が、全國の大小各學校に、現れて來たといふ事は、一層由々しき大問題であります。

畏くも明治天皇の御製に

よきをとりあしきをすて、外國に

まされる國になすよしもかな

と宣はせられた如く、外國の優れた文化は之を審査して、日本の國に適用して、爲になるものとして、之を取り入れ、忠君愛國義勇奉公質實剛健なる、日本精神に、充分消化させて、國家經營上、眞に有効である様に、應用すべきものであります。

その重大性を當局が深く考慮せず、淺薄な理想論に依つて、外面の形式のみに力を傾注して居りますために、一般の教育者も、多くはその型にこだはつて終ひまして、

教育と言へば、何れも立派な宏大な校舎を建て、莫大な資金を投じて、設備をする事であるといふ様な考へを持つ者が、多くなつた様に思はれます。

又教育者と言へば、資格を持つといふ事を重く見る様になりました。品性人格より、資格能力第一の方へ集注するために、總べての學科教育では、負けず劣らず、進歩致しますけれども、品性人格は愈々地に墜ちて、極端に言へば、今日の或一部分の、専門大學教育では、國家の莫大なる費用をかけて、名を教育といふ美名にかくれ國家を損ふ非國民を養成するといふ、叫びさえ聞く様になりました。

如何に何千萬の金を投じ、内外の新刊書籍を買ひ集め、圖書館に納めて、麗々しく金文字の背を並べておかれましても、内容を詳細に讀破して、研究するといふ、眞の教育者がゐないかと思はれる學校が可なり多い様に思はれます。

學校は設備を見せる所ではないのでありまして、眞に教育を施す所でありまして、爲に教育者の眞劍な努力と研究に依る、汗と涙の結晶が、その技術と魂が、眞劍な

力で、子弟の靈肉へ打込まなければ、教育の効果は現はれません。

不誠意な教育者は、常に外國の人の例を引いたり、昔の人の例を引いて、彼是批判して、教育の資料にしようと思はしますが、これは誠に、不誠意極まる事でございます。自己に眞に教育者として、強い責任觀念があるならば、他に例を引く必要なきが何うしてありませう。

自身先づ君に忠に父母に孝に、義勇奉公家庭圓滿、同胞相愛共存共榮の實を自ら行つて、その手本を示して、教育するならば、子弟はその尊き恩愛の徳に敬慕して、師の胸に心命を投げ込んで、光りについて來るものであります。

今日の我が國がかくまで、教育機關は普及され乍ら、人情いよく浮薄となり、家庭社會相通じて、生存競争が烈しくなりました。何處にも眞のうるはしき明るさが失はれて、犯罪者病患者のみが、願はないのに、急速度で膨大して、國運發展の前途を阻害してゐるといふ事は、教育者が半ば責任を負はなければならぬ所だと思ひます。

爲に今後、いよ／＼重大なる君國の運命を、双肩に負はなければならぬ、教育者にして、自ら普通の藝術家勞働者等の如く、職業意識を以て、常に二重三重の人格を以て、自己の眞心を偽り、世間を偽り、生徒の純情の發達を害する如き、不純な性格の教育家は、自ら反省して神聖なる教壇を下りて、自己を清算すべきであります。

かくして今後の教育者たるものは、小學校大學校たるを問はず、眞に完全なる國體觀念を有し、心身の健康は申す迄もありませんが、その人格品性智能共に兼備つた、圓滿なる人格者にして、常にその信念は、祖神、陛下に代り奉つて神の生み給ふ御子のために、又陛下の赤子のために、その體内に潜む國民精神を開發し、健全なる智能を授けて、國寶的人材を養成して君國に捧げる事を、終生の使命とするといふ、眞の聖賢君子の素質を備へた、人格者であらねばならぬと思ひます。

文部省は特にこの點に、教育の大方針を立てなければならぬと、師範教育改善、大學制度の改善等、形式組織等のみ如何程組み直して見ましても、立場が變るのみで、

何の効果もありません。

要は教育は魂を造るといふ、信仰的大信念に基礎を置き、教育者の素質を、根本的に人格本位に改善して終ふといふ事である事を忘れてはなりません。

教育は總べて、社會組織のものでありますから、之が完全に行はれて、國民に眞の人格が打込まれてゐるか否かといふ事に依つて、全般の社會に公正と不純が現れて、平和と矛盾とに分れるのであります。

教育は政治と同様三種の御神寶中の、八坂勾曲玉と八咫鏡の御神靈とが、その眞髓でございますから、この信念を一瞬でも忘れる様では、到底教育者として、自ら任じる等の資格はないものであります。

總べての教育者に、諭し給はんとする神の御心は、

「須く實に歸り國體觀念を基礎として、眞の神國日本國民のよき教育者たれ。」とお示し遊さるのである事を、深く確信して、この言葉を謹んで述べさせて頂きます。

した。

明治天皇御製

世の人に教ふる事も難からむ

身の行の正しからずば

神と宗教

次には神様と宗教に就てお話しさせて頂きます。

諸外国にも色々な宗教がありますが、我が国におきましても、二千年前佛教が渡
來致しましてから、一つの宗教となつて、國民の精神方面の教化を致して參りました。

この佛教は印度の麻伽陀國に生れた、お釋迦様の説かれた、佛説であります。日
本の國に釋迦が自ら造られたといふ、佛像と共に、朝鮮から送られて參りましたもの

でございます。

その佛體といふのは、今も尙信州の長野に安置してございますが、この佛説を基礎
として、その後色々な宗教家が現れて、佛教を研究し、自ら修業されまして、自ら一
派を開いた方もございます。

佛教の主なる宗派では、禪宗、眞宗、天台宗、眞言宗、淨土宗、日蓮宗といふ様な
區別がありますが、眞宗にも本派と大谷派とに分れ、禪宗にも曹洞宗と臨濟宗とがあ
るといふ様に、幾つかに分れて居りますが、元は一つの佛説から枝葉が出たもので、
別に變つた點はありません。

又佛教の外に、神を祀つてゐる、各宗派がございまして。

御嶽教、金光教、黒住教、天理教といふ様な宗教で、まだ澤山の宗派がございま
す。

之も各派がさういふ名前をつけて、一派を開いたのでございまして、祭神は如何な

る神様をお祭りしてゐるかど申しますと、その殆どは、宇宙の大靈であらせ給ふ、天
御中主大神様を始めとし、高産巢日神、神産巢日神、宇麻志阿期訶備比古遲神、天之
常立神の外高天原に於て天照皇大神様に仕へ奉つて、功勞驗かであらせられました、
神々様の中の何れかの神を、御神體としてお祀りしてございます。

又最近は、キリスト教の様な宗教が外國から参りまして、之を信仰する國民も澤山
出來ました。

キリストの教へを、特別新しい教への様に考へてゐる人もある様になりましたが、
又日本の神を敬ひ信ずる宗教と佛教とは、全然違つてゐるもの、様に、一般の民衆は
もごより、宗教家そのものも考へてゐる様でございますが、之は全然その考へ方が誤
つて居ります。

お釋迦様やキリストは、普通の人より格別眞心が強く、清らかな性格の人でありま
したゝめに、人生を住みよく明るく朗らかに生きて樂しみ得る様に、人の心を導き度

いといふ念願のために、己れの身命を犠牲にして、この道のために盡された聖賢であ
りますから、その偉大な徳こそ、尊いものでありますが、釋迦キリストと雖も、地上
にある土の一掴み水一滴をも、之を自己の力で造り、又消滅する事も出來得ない、一
つの小さな存在であつたのであります。

お釋迦様が、淨光佛と唱へて、人に教へ、又キリストが、天なる神と教へましたそ
の神佛なるものは、即ち宇宙の大靈である天御中主大神を指したのであります。

東洋西洋の區別なく、何處で示された神の名も佛の名も、之は同一の大神様である
事を思ひますれば、宇宙の大靈に二つはございません。

この宇宙の大靈天御中主神の御心に依つて、現はれ給ふ神々は、總べて皆世界總攬
統一の神にして、神の造り給ひし國土は、世界平和の源の國として、神に選ばれた神
國であります。

之がために、神國日本は、世界宗教の元であり、世界人類絶對幸福の發生の國であ

ります。

爲に各宗教宗派なご申しましても、その元へ元へと歸つて参りますと、唯一體の祖神に還り、開けば枝葉となつて、各思ひくの花が實を結んで行くのでございます。明治天皇の御製に

言の葉の花の色こそ變りけれ

同じ心の種と聞けども

又或る古歌にも

分け登る籠の道は多けれど

同じ高嶺の月を見るかな

以上御製古歌の通りでございますして、神佛を分けて信仰して見ましても、結局は同じ一體の祖神を尊び崇め奉る事になるのでございます。

この理を知らないで、徒らに宗教宗派にこだはつて、徒らな感情に依つて取扱はれ

て行くといふ事は、眞の宗教の本旨にもとるものでございます。

故に我が國では、この宗教を絶対に超越した、神道といふものがございますして、伊勢大廟初め、各神社は宗教の中に加つて居らないで、純正な神としてお祀りしてあるのでございます。

この純正な神宮神社は、國民の大祖神として、祀られて居りますために、宗教的色彩は持つて居りません。

常に君國と國民の守り神として、崇敬されて居るのでございますが、宗教宗派に屬する宗教では、或る一部の宗派を除く外は、病氣平癒祈願、運命開拓とか五穀のよく稔る様にとか、果は縁談、公事等にまで利用されて、色々な方法で加持祈禱を行つたり、供養説教等を盛に行つたりして居られます。

それがためにこの宗教に携はる宗教家が、眞に宇宙の大真理に通ずる、信仰的信念を有する大人格者で、神の如く眞の尊き慈悲慈愛の満つる人格を以て、一般民衆のた

めに、目に見えない真心の故里を常に教へ諭して、心眼を開かしめ、強き尊き信仰的
信念を涵養して、世の中の總べてのものを、この信念に依つて、取扱はせて行く様に
指導するのが、宗教家の天職であります。

爲に昔から、生ける神佛の如き神格を以て、よく人の心を導き、世を治めるために
社會の大光明とられた聖も、世に現れたのであります。

が現在の社會は、實に宗教家の威力は地に墜ちて、見る影もないものになつて終ひ
ました。

或るものをして、現在の宗教は、國家の阿片なりと叫ばしめました事を思ふ時、轉
た哀悲の念を禁じ得ません。

今日の宗教家は、祖師の趣旨に背いて、根本の聖の教へを踏み違へて、世の阿片又
は毒素となりかけてゐるといふ事が、事實ではありますまいか。

大方の本山は、自己の祖師の教への根本を忘れて、徒らに地位を争ひ、利害關係の

ために親子子弟の間柄にあるにも拘らず、白日の下に相争ふ有様であります。

又一般の布教傳道師等この道に携はる人は、終日金銭の奴隷となつて、衣冠束帯を
つけ、法衣を纏うて、神前佛前に侍り、依頼者の布施供養料に依りて、物持のために

は、緋の衣を纏うて社會の苦惱から離れて、黄泉の旅に行く者を送り、貧しき者のた
めには、垢つきたる墨染の衣を着て、唯一遍の念佛も、臆劫がつて、真心こめて、未

來を祈つて、その靈を慰めるといふ、眞の道義心を有する宗教家が少くなりました。

その他一般民衆の病氣、貧困運命の逆境から來る、様々な悩みを持つ人々に取り入
つては、巧みに神の名佛の名を行々しく利用して、金銭を取り上げ、貧しきものをい

よく困難の極致へ陥れる様な事を、大宗宗教家の如き態度で示してこの罪を堂々と犯
してゐる者もございます。

神様は決して生みの子を、殊更に苦しめ給ふものではなく、その大御心は、常に洪
大無邊に、唯平らけく安らかに、朗らかに幸福なる生活を營み得る様にこのみ、御守

護して下さるのでございます。

人が病氣になり又、様々な苦惱が生じますのは、誠の神の道に我から背くために朗らかな精神に悩みを生じたり、健全なる身體に、故障を生じて、病となるのであります。

この場合でも神様は、一刻も早くその悩みを取り除いて、身心共に健康な状態にかへらせ度いと、實に尊き御心に依つて、お救ひの手を伸べて下さるのでありますから人は心の悩み又體の病氣を生じた時、又世の中に生活して行く前途に障礙の起つた場合は、他に向つて彼是と考へる前に、先づ自己を顧みて、神の御心に背き、神の示し給ふた道を踏み誤つたのではないかと考へ、氣付いたならば、直ちに行を改め、清らかな明るい心持になつて、神の御胸に立ち歸れば、漸次に體内の組織が改り、病根が取り除かれ、精神の悩みも取れ、運命も開かれて行くもので、總べては皆神の御心にあるもので、病氣悩みは、悪魔の禍であります。

神は常に悪魔を近づけない様にと、守つてゐて下さるのでございます。

この道理を知らずして、勿體なくも神の御名を騙つて、弱者から法外な金銭を取り上げて、己の贅澤な生活の資になす如きは、如何なる宗派と雖も、決して許すべき事ではございません。

かゝる事實があるがためにこそ、宗教は國家の阿片なりと言はれる様な事になつたのであります、これが爲に無學にして弱きものは、一層深き迷信に陥り、全財産を失つて遂には、生存すべき力を失ひ、自己を消滅する様な結果にも立ち到ります。

神の御心を汚す事之より大なるはありませぬ。

若し世界の宗教家にして、眞に神の力に依りて、人の悩み病氣を即座に取り除きて恢復せしめる効力を、眼前に現はし得るものがありましたならば、その神力の偉大さを認める事が出来ませうが、數日間に涉つて、加持祈禱その他説教等をして、その病者の幸ひに健康を恢復した場合にのみ、加持祈禱の利益であるなどと稱して、金銭を

強要する等は以ての外であります。

何となれば人間には、神から心身を恵まれて、生れて来る時から、神は自然癒能力といふ、神の靈氣を與へて居られます。

常に正しき行をして、撓まず寒暑を屈伏し、心身を鍛練して、心身に靈氣を充實して居れば、病魔等は絶対に寄りつくものではありませんから、一生心身共に健康で押通す事が出来るのであります。

けれども冬は寒い、夏は暑いといふ風に、自然の現象に逆らつて、軟弱な生活を致しましたり、不正怠慢な行爲や、虚偽を行つた場合等には、自らさうした病氣の基をつくるものであります。

その場合でも、神は決してお見離しになりません。

全快する様に〜とあらゆる力を惜しみなく與へて守つて下さいますから、正しい心持にかへつて、強、祖神の御恩に感謝し、神様に心身をお委せして、ゆつたりし

た心持で居りますと、自然に病氣は癒されて、元の體にかへつて来るものでございませぬ。

爲にこの神から與へられました癒能力に對しては、如何なる醫師から與へられた名薬も、僅かな氣休めの程度の力しかあるものではありません。

若しお醫者様が、この説を間違つてゐると、仰有る方がありましたならば、私はお尊ね致します。

醫者の薬で、必ず全快するものならば、何故年若き人々が病院から、死體となつて墓場に送られるかといふ事を。

同様に亦加持祈禱で病氣回復の力を生ずるといふ、宗教家があつたならば伺ひます、その加持祈禱を受けた年若き人々に、早逝するものはない筈であります。

病氣になつた時、捨て、おいても壽命があれば治ります。どれ程加持祈禱をしたり、名醫の薬を浴びる程呑んで、莫大な金を費しても壽命の

ない者は助かりません。

この點をよく考へなければなりません。

昔日本には、醫學者もありませんでした。

殊に今日の様な西洋醫學や藥品などは、手に入れる事は出来ませんでした。

薬と言へば、野山にある草根木皮を長い間の祖先の經驗に依つて、用ひた位のものであります。

それでゐて、滅多に病人は出来ず、しかも朗らかで、愉快に世渡りをして來た事を思ひます時、誤れる醫藥と迷信的宗教は、尊き人の生命を奪ふ事の餘りに多い事を考へます時、曖昧なる宗教家の存在と、植物性食物に依る組織を持つ日本國民の體質に適合しない、動物性食物に依る組織を持つ西洋人の用ひる藥品等を輸入して、日本の體内に投薬したり、又注射したりする醫學者の存在は、實に國家將來の爲に、怖るべきものであります。

宗教は、純真な人の心を、迷信に導くものではありません。

飽迄祖神の大御心を我が心として、神の大悲大愛の大靈を我が魂に受け、之を世の總べての人に傳へ教へ導くために、人智に依つて發見されたる科學に融合して、世の中の人の越えて行く道の大光明となつて、大衆を導いて行くといふ事が、誠の宗教家の天職であります。

何時の時代でも、宗教家は、民衆に遅れて、引摺られて行くものではなく、いつも大衆の先に、宇宙の大靈である、大祖神の大光明を翳して、明るく朗らかに、住みよき人生開拓の行者として、立つべきものであります。

この點に就て、宇宙真理に在します祖神大神様の御心として、世の誤れる宗教家の反省を促し度いと思ひます。

自然と科學

二八六

次に自然と現代科學につきまして、申述べ度いと存じます。
現今に於きましては、世界各国から、偉大な科學者が、續出致しまして、各方面に渡りまして、色々な研究をされまして、次から次へと、驚く様な科學的の發明をされて居ります。

今日のあらゆる文化と申しますものは、殆ど科學的人智に依る發明でございます。そのために、稍も致しますと、世の中の人々は、科學萬能思想に囚はれて、人智至上論を謳歌する様々人々も、多くなつた様に感じられますが、この思想は全く過つたもので、又餘りに自然の力を知らない、遍狭な思想であると思ひます。
學者が終始一貫、懸命にその研究に心魂を打込んで、或る事を發明したと致しまし

ても、それは僅かに自然界に、嚴然と存在してゐた力を發見して世に公にしたといふだけで、研究されたもの、原素等を、自己が造つたものでもなく、又如何にしてこの地上に、存在してゐるかといふ、根本等を知る事は出来ません。

又自己がその業に専念努力して、よく努めて、遂に大發明をしたと致しましても、その事に當つて、努力した己れが、全身にそれをよく命令して、専念研究せしめた靈力も肉體も、自己が造る事は出来ません。

のみならず、他に求めやうとしても、絶対に人の力で、求め得られるものではありません。

總べての人は、父母の肉體を通じて、生れて來るとは申しましたが、その源は神秘不可思議な、大自然の力に依つて生れてゐる事を知る時、人もその他の動物も、地上の萬物皆、その生みの親は、大自然なる宇宙の大靈である事を、知らなければなりません。

近頃の色々な書物などには、宇宙地球人生といふ色々な事柄について、色々學説を立て、ゐられますが、餘りに科學的にのみ、凝り固つた、學者の説を見ますと、世の中には、總べては皆理窟で固めて終つて、神様もなければ佛もなく、従つて眞理も道徳も感謝も信仰も、全く根據のないもの、様に説き、又之を拒むのみでなく、一の迷信として、一笑に附するといふ様な學者もあります。

さうかと思ひますと、又これとは反對に、極端な哲學又は宗教に凝り固つて、精神界靈界の方面のみを、研究して、社會を總べて暗く見たり、人間を罪人として、裁かうとする様な、思想を持つ者もあります。

何れもこれは、極端から極端に走るもので、決して當を得たものとは言はれません。さうした偏つた思想主義を持つ、學者などの力では、決して世の中は、人間生活の眞に朗らかに明るく、住みよくなるものではありません。

どれ程眞剣で、研究して見たとて、人類の元祖が分つたり、その外地球が出来たのは、何億年前であるか、地球の元素は誰が造つたのか、その他太陽、月、星の世界等の事を、幾ら研究して見ても、人間の力で分るといふのは、全く一部分の事だけで、總ての源へ尋ねて行くと、神秘不可思議な存在として、到底人間などでは、想像も及ぶものではありません。

それでございますから、假令その道の權威を持つ、専門學者でも絶對的に探る事の出来ない、神秘的の事まで立入らうとして、徒らに無意味な時間と、精神と肉體を疲労せしめるよりも、目前に現れてゐる、現實の眞理を見れば、何事でも容易に解決がつく譯であります。

地球や太陽や月や星が、その始め燃焼してゐた、ガス體であつても、現在それが活動を續けて、總て世界中に存在するものが、逐次變化しつゝあるとしても、人智に依つてそれを、ごうする事も出来ない、大宇宙の現象に對して、兎角の臆測を巡らす必要はないと思ひます。

唯人として大切な事は、地上萬物の生命は、肉眼で見えない、自然宇宙の大靈の力に依つて、生れ養はれて居り、この萬物の成育されて行く有様には、極めて大なるものから、目にも止らない小さなもの迄、秩序整然として、生存し得るに必要な條件が伴はれて行くといふ事は、あらゆる草木にも、極めて小さな昆蟲にも、見る事が出来るのであります。

殊に萬物の靈長として、自ら確信して働いて居ります人間の、生存するに必要な體の内外の諸器官の構造、智能の發達、感情の應用自在等の力を見る時、この生命と靈とを授け、絶えず人類初めその他の動物植物等を、生み養ひ給ふ、宇宙の大靈の力の洪大無邊である事を、知らなければなりません。

何のために私は、今このお話をするかと申しますと、學者は學理に偏つて、眞理を没却する場合が多いために、不知之識の間に、取り返しのつかない過ちを、生ずる事があります。

例へば宇宙の電氣を應用する發明品は、世界中共通の文化として、應用すれば大變便利であります。

汽車、汽船、電信、電話、ラヂオ等も、皆これは世界共通の文化でありますから、一國で獨專しやうとしても、それは到底出來るものではありません。

成るべく世界共同に、利益になる様、便利な様に研究して、最も優秀な力を發見する事が、結構でございます。

しかし世界共通の絶對に不可能であるものが、澤山ある事を知らなければなりません。

地球は人の手で造つたものではありませんが、西洋と東洋に分れて、圓形であります。

そして地質も生物も變つて居ります。

ために昔から西洋に屬する人類は、食べ物が動物性のものを多く撮りましたので、

骨も肉も血も、動物性食物に依つて組織されてゐます。

東洋に屬する人類は、古來植物性食物から、骨も肉も血も組織されてゐますから兩者の體質は全然異つて居ります。

そのために一寸見ても、肌の色、目の色、髪の毛の色までも違つて、西洋人は肌も白く、眼は青く髪の毛は茶色であります。

東洋人は、肌が黄色で、眼は黒く、髪は眞黒であります。

外部に現れて見えるだけでも、之程違つて居りますから、内部は想像が出来ます。

それが最近西洋醫學が大變發達して來ました、めに、東洋各國は多く西洋に科學的醫學を習ひましたので日本でも獨逸始め、その他の國に學ぶ所が多かつたのでございませぬ。

それがために、動物性である西洋人種の體に、適當な藥品を、日本へ持つて來て、全然體質の違つてゐる、日本人に用ひさせたりするから、却つて反應が起つたり、副

作用が起つたりして、一層病勢を募らせ、生命を奪ふ様な事になるのでございます。

只今日本には、七萬人以上の醫師があり、六千人以上の醫學博士がありまして、醫業に専ら當つて居られますけれども、その大方のお醫者様は、外國醫學を學んで、用ひる薬も西洋の薬品を用ひますために、醫師が殖えるといふにも拘らず益々死亡者と重病人が増加致します。

之を見ましても、日本の醫學界が、如何ばかりその眞の研究を誤つて怖るべき結果を來してゐるかといふ事を、知らなければなりません。

重ねて言ひますが、人間の體には、諸病を防ぎ、又病氣に冒されても、この病氣を取り除くために、強い力で絶えず活動して居る力がありますから、僅かの病氣や怪我位は、捨て、置いて、その靈氣が強く全身に働いて、治癒して終ひますけれども、萬一氣力弱々しい場合は、自己の靈力で、治す事が出来ないものであります。

さうした場合は、その患部に、刺戟を與へて、全快作用を起させ、靈氣が完全に患

部に満ちて来て、血液の循環が盛になる様に助けるために、各種の治療法も施すものであり、又切開手術等も同様の目的とするものでありますから、投薬治療共に靈力の働きを、助けるためのものでありまして、靈力が病氣治療の根源で、治療投薬は、輔佐作用であります。

ですから世の中の醫師も患者も、共にこの眞理をよく／＼考へて、矛盾した行爲があつてはなりません。

爲に昔から、「病は氣から」と申しまして、一つの精神作用から、諸病を引起して惱むものもあります。

又病氣に冒されましたも、靈氣が充實した、氣力の強い人は、重病をも征服して、忽ち全快出来るに引換へ、僅かな病氣でも、氣力の弱いものは、我から病氣に負けて様々な迷信に陥つたりして、一層神經を悩ましますために、どれ程の高價な名薬を呑み、名醫が治療を行ひましても、全快が出来ないで、一命を終るものもあります。

かやうな事實から考へて見ましても、今後に於ける醫師は、心身を支配する靈の力といふ事を考へないで、唯藥品治療の研究、殊に西洋醫學のみを尊重してゐる様な事では、絶対に役に立ちません。

それのみか、尊き祖國民族に禍ひするといふ虞れある事に、氣付かなければなりません。

この點から申しましても、一般の科學者や、醫師等は、自分の天職に直接關係が深いのでございますから、總べての物資を支配してゐる、靈の存在をはつきり知らなければなりません。

神秘不可思議な宇宙の大靈である、神の御力を認める事が出来ない様では、眞の科學者でもなく、醫學者でもないと思ひます。

世には神の存在を認めずと傲語する、絶對的無神論者などがありますが、若し神は形に纏む事が出来ないから、認める事が出来ないといふならば、その人に尋ねて見度

いと思ひます。

世界の如何なる有名な醫學博士と雖も、その全身の行動を常に支配し命令する、權威者である、心を體內から掴み出す事の出来る力を有するか。

神の有無を批判するものは、之と同じでございます。

自然と科學と、神と科學とは、密接なる關係を持つてゐるものでございますから、世の中の人々は、この眞理をよく／＼考へて、如何なる文明科學の自然眞理の力に依つて生れ、又之に依つて活動しつゝあるものであるといふ事を、この絶對無邊なる力を神として尊び、感謝するといふ事は、決して間違ひでないといふ事を、はつきり知らなければならぬと思ひます。

思想と國體

科學的食物や藥品が、西洋人東洋人の身體の組織に對する効果が異つて居ります様に思想の方に於ても亦同様でございます。

西洋と東洋とは、地質も植物も人種も異つて居ります通りに、思想も異つて居ります。

これはその國々の發達して來た起因、歴史、風俗、習慣等に依るもので、容易に動かす事の出来ない、一つの國風となつてゐるのでございまして、單に西洋又歐米と申しましても、一致同様なものではございません。

その國々の國情に依つて、民族の人情風俗が變つて居ります。

又同じ東洋と申しましても、印度、シヤム、支那等の國は、夫々國體が違つてゐますから、國民の人情、風俗、習慣も變つて居ります。

殊に我が日本の國は、世界各國とは、國體の淵源を異に致しまして、神に依りて、國土は産れ、神より生れたる天祖の生み給へる、天孫に依りて、萬世一系の聖天子を

仰ぎ奉り、民族は等しく、八百萬の神の子孫でございませうために、大宇宙の大靈に在し給ふ、祖神の真心、正義、武を真隨として、忠君愛國、義勇奉公、質實剛健、質素儉約、共存共榮を信條として君臣一體の力で、築き上げて参りました國體であるといふ事は、委しく申述べました通りでございませうが、それが今日非常に國民の思想が、四離滅裂となりまして、國民精神の統一が亂れて参りました。

それがために、學者にも教育家にも、宗教家にも、實業、農業者等の區別もなく、大方は利に走つて、實を忘れるといふ、傾向になつて参りました。

益々各方面の統制は亂れて、病人は増加する、犯罪者は殖える、經濟は行詰るといふ風で、文化満開を外所に、慘憺たる光景を示して参りました。

之は何故であるかと申しますと、日本の國民が、明治以來、歐米の文化の發達に驚嘆し、之を禮讚する餘りに、あらゆる科學を、西洋から直輸入して、國家を禍したと同一様に、國體の真隨となる、國民の精神の食として、絶えず培つて行かなければな

らない、真心の食を、古來の日本國體の中から、祖先の靈から取らないで、徒らに歐米各國の地理、歴史、文藝、宗教等を直輸入して、之を殊更に、尊敬し、禮讚して、目から耳からその精神に取り入れられましたために、日本國民の精神の中に、中毒を起しまして、身は日本人であり乍ら、心は歐米人かぶれがして、常に歐米の文化に陶醉し眩惑されて、祖國日本の尊嚴を忘れて、曖昧な態度を取るものもあり、甚だしきは、外國思想竝に、外國の信仰にかぶれて、祖國日本の國體を覆す様な運動を起す様な愚かしき者が、しかも最高學府から現はれるといふ様な、奇怪な事になりました。

日本の國體を害するもの、雷に誤れる醫學、科學のみではなく、實にその根本は、神國日本に相容れざる、外國思想に起因するといふ事は、言ふ迄もない事でありませうから、政治家を始め、教育家、宗教家等の天職にある人々は、殊に君國の重大性に鑑み、自己の使命とその思想を顧みて、過去は知らず、今後は必ず外國のよき事のみを採りて、古來日本の神國精神である、大和魂に消化させて、無姿有形を通じて、真に

偉大なる日本民族の精神と智能の力を發揮して、全世界に向つて、國體の精華を輝かしめ、祖神の御心であらせ給ふ、世界人類平和への公道を開かなければなりません。

自然と農業

農業は萬民生命の親でありまして、之程尊い天業はありません。

それであるのに、どうした事か、近頃の農村の、殊に年若い人々の中には、農業を卑しき業の様に輕んじて、之を避け、自ら農村を捨て、都市へ出て、他の職業を撰んで、生活しやうといふ考へを持つ人が、可なり多くなつた様に考へられます。

人口が年々増加して、耕す土地がないために、又は日本民族の海外發展を目的として、殖民地を求めて海外へ行くといふ様なのは、結構でございますが、唯農業は利益が上らないとか、興味がなとか、仕事が卑しいとか骨が折れるとかいふ様な考へか

ら、農村を見捨てるなどといふのは、心得違ひも甚だしいのでございます。

唯單に農業を輕んじ嫌つて、農村を捨てる様な人達には、絶対に信仰といふものがない結果であります。

それがために農業が、どれ程尊い天職であるかといふ事が、分らないからであります。

農家にして、深い信仰がありますならば、毎日直接に親しんでゐる土は、人間始のその他の、如何なる者の手にも出来ない、神の賜であるといふ事が分ります。

農夫が如何によく調べた種を、時を忘れずに蒔きつけても、土に種を歸らせる、母としての力がなければ芽は出ません。

と同時に、天に太陽あり空氣があり水分があつて、偉大なる自然の靈氣が大地と合して、始めて、總べてのものが、伸々と生み出されて來るのだと思ふ時、農夫は毎日生ませる力の天の父の力に接し、生む力の土の働きを見て、この中にあつて、天地陰

陽和合の、神祕不可思議的な力に依つて、育てられて行く五穀野菜を、成育せしめられるのを、手傳はせて頂いてゐる我であると思ふ時、天地の神の純真にして、よりよき助手であると思つたならば、どんなに自己の職業のうるはしさ尊ぶべき有り難さがはつきり分つて、感謝しないではゐられないと思ひます。

さうして一年、春夏秋冬、次々に變化を起されて行く自然の御親の御天業に仕へ乍ら、全く人でなく、物こそ言はぬけれども、真心の弱さも強さも我から打込むだけの力を、そのまゝ受け入れて、現實の力に現はして、目の邊りに見えるものは、農作物が一番著しいのでございます。

農夫が眞に大自然なる、神の宇宙の大靈を知つて、信仰的大信念を以て大地に立ち黎明の鐘を聞きつゝ、朗らかに赫々として、昇天して輝く朝の太陽を迎へ、燦とした夕映を投げかけて、西山に沈む夕日を送る迄、自然と共に朗らかに歌ひ、朗らかに語りつゝ、汗と真心を大地に打込んで行く時、大地からは、無限の喜びが、芽生え出て

花と咲き實と成つて、地上をうるはします。

この野を守る人々に與へられたる幸福の原理を知らずして、徒らに他の職を求めて迷ふ如きは、愚かしき極みであります。

小作争議等を起して、お互に争つてゐるのも、皆農夫としての信仰的信念がないためでありまして、眞の農家としての幸福を得やうと思ひますならば、お互に利害得失等の感情に囚はれないで、さうした無意味な事に費す努力と感情を土の中へ惜しみなく投げ込んで参りますと、土は大悲大愛の力で、皆之を受入れて、よき花も咲き實も成つて、同じ段歩の田園からでも、數倍の收穫を得て、喜ぶ事が出来ます。

小作者が毎年豊作でも不作でも、定つた様に地主へ、小作米を負けよといふ様な交渉をする事ばかりを考へて、冗な時間を費したり、感情を濁したりしてゐるよりも、有り難い勿體ない感謝して、いつも家内揃つてにこゝこ、心和やかに一心に働けば、小作米は規定通りより榊目を多く測つて地主に渡しても後に残された米の石高の

多いのに、我作ら吃驚する程の喜びを、年々得る事の出来るのは、當然であります。農家は商法とは違ひまして、算盤を弾いて、損得を考へるものではなく、誠心と汗を天と地に打込む事さえ忘れなかつたならば、神様は常に心と體に徳の殖える様にはかり、有りがたい算盤を入れて下さいます事を忘れてはなりません。

汗と誠が大地で稔る

農は尊い神の業

神と商業

商業家としての天職を持つ人は、兎角鋭い利害得失觀念に支配されて、神経を無駄に勞し過ぎる様に思ひます。

これがために却つて、双方に蒙る損害が、大きい様に思ひます。

一定の収入が毎月固定してゐて、生活の安定の出来てゐる、官公吏、學校教員、銀行、會社員とは違つて、毎日品物を買賣して、その間の利益を得て、それを生活の資に立て、行かなければならない商家としては、始終自身の經營する商賣上の事で、利害得失を考へて、巧みに經營しなければならぬといふ事は、當然の事でありすが世の中には、全く商法道徳といふものから、脱線して、不道徳極まりない思想を常に持ち、實際にも不道徳を行つて、澤山の人に迷惑をかけ、己れが不當な利益を得る事だけを、商賣の道だと考へ、又さうした不道徳に依つて、資産等を造り上げた人を、成功者の様に誇るといふ、愚かな人さへあります。

これは誤りも甚しいものであります。

商法に身を置く者こそ、眞に世の中の人々の共存共榮といふ事を、はつきり知らなければなりません。

又之を營業道徳として尊とばなければ、眞の商人として成功する事は出来ません。

呉服物にせよ、雑貨、穀物、八百屋物、海産類にしましても、賣る店だけ澤山あつても、買手がなければ立ち行きません。

それと同様に、買ひ度いと思ひましても、何處にも賣る店がなければ、お菜の一葉お魚の一切も布の一尺も、我が手に入れる事は出来ません。

お互に賣る者と買ふ者とあつて、始めて商賣が成立つのであります。

それが賣る方の身になれば、少しでも利益を多く得度いと思ふのに反して、買ふ方では、少しでも品物のよい物を、安く手に入れ度いといふ、慾望を持つて居りましてそこに大きな開きがあります。

それで商賣をするのには、自分の立場ばかり考へてゐては宜しくありません。

いつも買手の立場と心持を考へて、品物を取扱ふのに、常に真心といふものを、忘れてはなりません。

商法にも深く強い、信仰的信念があつて、商賣品となつて、自己の前に現れて来る

様々な品物を、作り出された澤山の人々の汗と苦勞を思つて、深く感謝すると共に、尙人智の及ばない所の、天地の神の、無限なる大悲大愛のお力に依つて、造られた天恩物であるといふ事を考へて、品物を大切に取扱はなければなりません。

殊にお客として、その品を望まれる人は、取分け因縁の深い人でございますから、これを尊び、懇ろに取扱つて、品物もよく調べ、反物類ならば、幅尺を始め、疵の有無をよく調べ、地質染料等、確かであるか否かを檢して、お客に充分の諒解をさせて出来るだけ利を薄くして、お客の利益を計る様にしなければなりません。

萬一商賣氣質を起して、その場だけ巧みな言葉で不良品を高價に賣りつけたり致しますと、後で信用を落して、客が段々と減じて、遂には大きな商店も經營が出来なくなりません。

反對に店は小さくとも、家内中深い信仰を以て、客に親切丁寧で、品物をよく調べて、間違ひのない物を、薄利にして客の利益を本旨として、商ひを致しますと、どの

様な商賣でも、自然に信用が高まつて、客足が繁くなつて参りまして、信用の篤い、しつかりとした大商店になるものでございます。

かういふ風に常に考へて經營するのが、商賣上手で、始終かうした心掛を持つて業に勤む人こそ、遂には大實業家として成功出来るのでございます。

實業家には、よく株とか相場等に手を出す人が多い様でございます。

尤も實業家でなくとも、その人の氣質に依つて、さうした事を好む人もありますが株や相場等に興味を持ち、之に手を出すといふ事は、本當の正しい實業家とは言はれません。

何となれば、あゝした事は、一つの賭仕事の様なものでございますから、お互に濡手で粟を掴む様に儲けやうと考へて、資本をかけるのでございまして、運よく當れば利益が得られますが、反對の場合は全部取られて終ひます。

それですから、儲けたと言つて、有頂天になつて喜ぶ人の反面には、悲哀のどん底

に沈んで惱亂する人が出来るのでございます。

かうした賭事に依つて儲けたお金は、假令調子よく、金持として成功出来たとしても、真心も眞實も籠つてゐない淡雪の様なものでございますから、有ると思ふ間に、幻の様に消えて行くものでございます。

世には知能、學才、人格、品性等、少しも備つてゐない人に、ごうかすると、株、相場等に依つて、思はざる利得を占めたため、得意になつて、傲慢贅澤な生活をして濫りに威張つたりしてゐる人も見受けますが、かういふ人の手に入つた金は、同じお金でも金が死に金になつて、その人の爲にも、世の中のためにも、毒素になるのでございませぬ。

それ故世の中のためになる様に使はれないで、傲慢、奢侈、贅澤、遊蕩などに使はれて、本人の心身を害ひ、社會を毒する事になるものであります。

かうした點から考へまして、商賣は決して、正しき道に依つて得たる利益を尊ぶ以

る人達が、可なり多いのであります。

その一方、物質に恵まれてゐない人達は、自分達は貧しいがために働かなければならぬ。

若し金があつたなら、遊んでゐて樂をして、贅澤をして一生暮されるのだが、自分達は運が悪いといふ風に考へたり、又労働をして、日々の生活費を、得なければならぬ、現在の自分の運命をかこちて、過去に於ける親、兄弟、親戚その外色々の關係のある人達に、罪を被せて、考へて見たり、色々な不満や愚痴を繰返しつゝ、不愉快な心持で労働をしてゐる人があります。

さうした不満や不平が嵩じますと、現在の社會制度や組織に、不満不平が起つて、色々な主義者に煽動されて、騒ぎ始めるといふ様な事にもなるのであります。

もどくこの世の中にある物は、塵一本、土一掴みと雖も、人の力で造られたものは、何一つもない事は、何遍も申上げた通りでございます。

ですから地上の物を、人間にして我が物と、絶対に言ひ切る事の出来るものは、一つもありません。

それを現在の様に、人に所有權を持たせて、支配させるのは、社會組織を統制するために必要として、法律が造られてありますために、その法律で認められる事になつたからであります。

それがために所有權は、絶えず右から左へ、人から人へ移つて行くものでございませうが、その所有を多く持つたとしても、所有者は、自分の物であるなご、思ふのは、大變な間違ひであります。

これは或る因縁から、一時神様からお預りしたのだと考へて、扱これをどんな風に使ひ動かしたならば、神様のお心にも叶ひ、世の中のためにもなるかといふ風に考へ成るべく廣く大きく役立つ様に働かせるのが、その人の腕前でございます。

それを過つて、自分の者になつたのだから、自分が勝手にしてもよいといふ様な考

へで、人の爲にも社會のためにもならない事のために、その物質を使ひますと、忽ち天罰を受けて、病氣になつたり、人から信用を落したり、思はざる災難が起つたり、不良な事が出来たりして、惱ましい事ばかりが、家庭やその身に起つて、體や心を絶えず苦しめて、幸福といふものは、全部神様に奪はれて、財産はあつても、惱みの毒素の様なもので、怖ろしい禍の種になるのみでございませう。

かうした禍の種を抱えて、戦々憚々として、その日を送つてゐる様な物持が、今の世には珍らしくはないのです。

共産主義者と聞いたゞけでも、身の毛のよ立つ様な思ひが致しますが、何故共産主義者はそれ程、世の人に怖れられてゐるか、又當局の手に依つて取締られてゐるかご申しますと、餘りに思想が極端過ぎて、現代の日本には、合はないからであります。

若し共産主義者の唱へる様な事を、實際行ひますと、社會の組織制度が悉く破壊されて、國體が轉覆する様な虞れがあるからでございませう。

それならば、共産主義者は、全部國賊に等しきもので、世の中を呪ふ惡魔の様な人達かと申しますとさうではありませぬ。

中には道德觀念の強い、信仰的信念もあり、殊に知能等に於ては、特に優れた人々もあります。

かうした人口は、ごんな意見を持つてゐるかご申しますと、現今は法律制度が悪いから、人々は殖え品物は高くなつて、生活が困難になるのに、地上の物は土一掴み殖えてゐない。

それに或る一部分の財力を集める事に妙を得た、人達のために、物質は一所へ吸収されて終ふために、直更貧しき者は、機械と資産家に、勞力と物質を奪はれるために生きて行かれない。

ために平等の力で生きて行かれる様に資力を平均する様な制度に立て直さなければならぬ。

之が人間生活の眞理の常道であつて、現在の制度は、不自然だと叫ぶのであります。その運動が極めて眞剣でありますために、嚴然たる態度で調べてゐる司法官や裁判官、辨護士等の中でも、その主義と力に、同化されて、自ら職を投げ出して、その主義の中へ飛び込むといふ様な事になつた事實があるといふのは、實に由々しき問題であります。

假令司直がどの程の力で、かうした主義者を、國內から撲滅しやうと致しますにしても、現在の様な法律制度を改めない限りは、濱の眞砂の様に現れて来る事は、當然であります。

何となれば共産黨の共産主義を叫ぶのは、決して細民階級、労働者階級の罪ではなくて、其の對照となるものが、法律に依つて保護を受けて、神に背き、陛下に背き、眞理に背いてゐる、有産階級であるからでございます。

かやうに申しましても、私は決して共産主義者の肩を持つて、社會制度は共産主義

が理想であるなどと考へてゐるものではありません。

そのみでなく、共産主義などは、實に浮薄な空想論であると思つて居ります。

何故かと思つても、人は顔形の違ふ様に、その性質も違つて居りますから、先天的に勤勉家もあれば、遊惰な者もあります。

今假りに平等を尊んで、同じ二人の者に、平等に拾圓づゝの金を與へましても、一人は之を資本として働けば、翌日は倍にも徳を殖しませう。

それに反して、他の一人は、花柳の巷にでも入り込んで、一日遊んだとしましたならば、翌日は丸裸になつて終ひませう。

僅か一日の隔りでさえ、その通りでありますから、千差萬別の個性を持つ國民に對して、共産制度など、實に思ひもありません。

之は絶対に實現の出来る事ではありません。

それかと申しましても、今の様に、萬古不變である地上の物質を、法律の守護を受

けるがために、或る一部分の者に、無制限に集中して終つて、澤山の民衆殊に尊い神の子である赤子が、食ふに食なく、住むに家なく、働くに仕事がないために如何にもがいても、人間として生きる道を求める事が出来ないで、惱亂の末に親子心中迄しなければならぬといふ現狀に立到つたといふ事は、容易ならぬ社會問題であります。これをこのまゝで、時世時節だなどと言つて捨て、おきますならば、國民生活の安定は破壊されて、古來の國民精神、國體觀念等も麻痺して、いざといふ、國家總動員を要する様な、事件が勃發しても、眞に協力一致して、君國擁護のために、當るといふ事は出来ません。

國礎の安定は、陛下の赤子、萬民の一人々々に到る迄、陛下の御稜威に浴して、衣食住の資を得て、日本國民としての生活に感謝する事の出来る様に、國民生活の基礎を築かせておかなければなりません。

殊に國民皆兵の義務を有する日本に於ては、一層この組織施設が肝腎であります。

如何に資産家が土地を多く持ち、株券や銀行預金を多く持つて、國家の富力は自分達の力で動く様に思つて威張つてゐても、萬一國家に重大事件が勃發して、世界各國からの侵略等を受けました時、國民に之を排撃せしむるだけの絶對的身心の力が満ちてゐなかつた場合に、到底妨ぐ事は出来ません。

君國が萬一敵に侵略された場合は、土地は愚か株券や預金證書等は紙屑にも等しく生命等は木葉微塵となつて消滅するのは當然でございます。

この事實を思ひますれば、外國は知らず、神國日本に於ては、明治天皇の宣はせ給ふ五ヶ條の御誓文の中にある如く、

「官武一途庶民に至る迄各々その志を遂げ人心をして倦まざらしめん事を要す。」

この御聖旨を政治の根本として、各般の法律に應用されなければなりません。

尙又勞働者としての境遇にある人の、よく／＼考へるべき事は、神様は公平であらせられますから、神様は自由をお與へになつてお出でになります。

成功は自由に出來ます。

又労働は神聖でありますから、天の與へ給ふ徳を受けて、神と共に働くといふ信念で、身を惜しまず、汗と涙を捧げ、真心を以てその業に打込んで参りますと、仕事に深い興味が出て疲れる事はありません。

身體は益々健康に練磨され、心は爽快に氣分は朗らかなり、食物もおいしくよく眠られます。

そしてよく汗を惜しまず、働く者は、人から信用が増して、資力も出來、地位も高められて参ります。

心身を以て眞實に鍛へて参りました誠の品性人格は、總べての人に認められて用ひられますので、必ず運命を開いて行くものであります。

何時までも不満不平をこぼし、愚痴を言つたりして、汗を惜しみ涙を惜しみ、眞心に業に打込まないで、無意義な日々を過して居りますと、體も精神も懦弱になり

人からの信用も失はれて、何時になつても、運命の開拓されるものではありません。

かうした點から考へまして、何事も天を相手にして、誠を捧げて眞剣で働く者は祝福され、天の徳を貪る者は神と人に裁かれて、不幸に陥るものであります。

この眞理を考へてみますれば、世の中の人には、物持であるないといふ様な事は、別に大した事ではなく、重要な事は、各々天から受けた、その肉體と精神とをしつかり守つて、神と共に働いて、神の御心に叶ふ様に、天から預かつた、物質と體と魂を正しく眞理に合致させる様に、働かせて行くか否かといふ事が大切な事でありましてこの道に叶つた者が、生死を越えて、神から祝福されて、眞の榮光を受けます。

若し眞理を没却して、神と陛下の御心に背いた人は、己れの持つ資力と肉體と魂が毒素と化して、滅亡するのは當然の事でありまして。

地球は一瞬の狂ひもなく廻轉してゐます。

太陽は晝夜缺かさず照り輝いて、世界萬物を生み養つて居ります。

宇宙大自然は、一つとして活動しないものはありません。

その中であつて人間が、如何なる條件をつけたとしても、働かずにゐて、唯食ひ唯呑み唯遊んでよいといふ道理は、絶対にありません。

勞働は神聖にして、宇宙の眞理であります。

唯眞心も血も涙も、天と地に惜しみなく捧げて、神と共に無條件で働く者の上のみ、眞の幸福はもたらされ、大光明は行手に輝くのであります。

身分、地位、財産等の有無に拘らず、總べての人が平等に神の子にして、

陛下の赤子である事を觀念して、陛下と神の御心の如く、お互に愛と眞心を捧げ合つて助け合ひ、共存共榮の生活を営む事が、人の道であり神國日本の公道であると考へて最善の道を盡しましたならば、現在の惱ましき幾多の國難は悉く解消して、九千萬の國民が共に手を取り、眞に明るく朗らかにして、住みよき社會組織の上に榮光輝く樂しき生活を、謳歌する事が出来るものと確信致します。

故に勞働の神聖と社會組織の眞理を申述べた次第でございます。

世界の情勢と國防

地上世界は、皆平等なる幸福を旨と遊ばされる、神に依つて、御支配を受けてゐるのでございますから、自然の大理想から申せば、總べての組織制度が平等であつて、總べてのものが、悉く満足して、生活し得られるべき筈でございますが、現實の世界の有様を眺めます時、神様の御心に反して、不平等極りなく、人心唯徒らに荒み、生存競争は月日と共に激しく、之がために世界人は、擧つて容易ならぬ慾望に眩惑されて、自ら自國を滅亡の運命に導く様な、準備に狂奔しつゝあるといふ状態であります。

地球は圓くして、東洋と西洋に分れて居ります。爲に造化の神様の御心に依れば、東洋人の土地は東洋人に、西洋人の土地は西洋人

のためにとて、造り與へ給ひ、此處に人類をお生みになつたのであります。

この根本の原理を考へて見れば、自ら定められた天分といふものは、はつきりと分る道理でありますから、そこには些かの矛盾もない譯であります。

然るに現在の世界人類生存の状態を眺めますと、凡そその數地球上に、二十二億人餘りございます。

その中、東洋人に屬するものは、十四億餘り、西洋人に屬するもの七億餘りで、之を比較すれば、東洋人は西洋人の約二倍に當つて居ります。

然るにこの人種を養ふべき土地の面積は、人口數と反對に、西洋が凡そ八割弱を占め東洋人の所有に歸してゐるもの、二割強といふ奇現象を呈して居ります。

かくの如く、人口少き西洋人が、廣汎なる土地を多く地球上に持ち、人口稠密である東洋に、僅少な土地しか守る事を得ず、現在に於て既に、東洋は西洋人種のために當然の所有權を侵略され、壓迫されてゐるのであります。

尙その上に、西洋人種は、僅かに残されたる、範圍狭き東洋に手を伸べ、侵略して西洋人の支配下に收めんといふ、慾望を以て、絶えずその作戰計畫を續けてゐるのでございませう。

地球上の戦ひは、今や東洋と西洋の人種の戦ひの時代に迫つて行くのでございませう。公明正大なる大宇宙の大靈である、大祖神に依つて、嚴然たる裁きを受くる日も近づいて參つたのであります。

しかも宇宙の大元靈にあらせ給ふ大神より選ばれて、地球上に眞理の利劍を揮ひ輝かせ、邪惡を滅亡せしめ、正義を守つて、地球上を平定して、眞理の世界に造り改める天業のために、翼賛して立つ國は、神の造り生み給ひし、神國日本民族であるといふ事は、今更言ふ迄もない事でありませう。

爲にこの世界の大きき大勢に鑑み、日本皇國の使命の重大さは、言語に絶して餘りあるものであります。

今日の日本は、非常時國難と叫びますけれども、之が一朝一夕にして起つて来た、人爲的問題ではなく、過去數億幾千萬年の年を経て来た間に、徐ろに現れて来た、世界改造への神の御心でありますために、人爲に依つて單純に解決のつく様なものではないのであります。

總ての人々に、よく世界の狀勢と、東洋の現狀を諒解して頂くために、例を解り易く、滿洲國の獨立に引いて説いて見ませう。

東洋より先に、化學的文化を發明した、西洋人種は、之を巧みに利用して、海陸の便を計り、神の藏し給ふ土地を次々に發見して、廣汎な領土を、我が權益に收める事が出来ました。

それのみならず西洋は、最近相競ふて、文明化學の力なき、不文明なる東洋の諸國を侵略して、その民族を武力に依つて征服して、領土の所有權を奪つてゐるのでございます。

印度の現狀などは、最も著しきその一例であります。

かくして各國は、東洋へ東洋へと、侵略の手を伸べまして、東洋第一の大國であります支那が、最近國內の統制が亂れてゐますのを好機として、様々な條件を附しあらゆる手段を以て、支那に取り入つて、自國の權益を得やうと、力の限りを盡します。故に現在の支那は、宛ら世界各國の共有物の様な状態に置かれて、支那國民自らの力に依つて、自國を保護し、統制する實力がないといふ、眞に憐れむべき状態にあるのでございませう。

今東洋に於て、獨立國家としての、地位を守つてゐる國は、日本・支那・シヤムの三ヶ國でありまして、滿洲國は、立派な嚴然たる獨立國として、存立しては居りまして、日本以外の國は認めて居りませぬので、以上の三ヶ國だけが、今世界各國と共に平等な權利を保つてゐる譯であります。

しかし乍らシヤムは、嚴然たる獨立國ではありますけれども、國が餘り大きくあり

ませるので、絶對的東洋の權威國として、國威を世界に輝かすといふ事は、容易に出て來る道理はありません。

明治以前の幕末當時は、世界各國人が、神國日本を發見して、太平洋から遙かに望むと、雲の上に悠然と聳える、富士の靈峰の英姿を始め、山紫水明繪にも描き出せない程の、秀麗な風光に恍惚として、この國を我が手に收めやうなどといふ、野望を抱いたのでありますが、この國こそ宇宙大元靈の祖神に依つて、生み出し給ひし、神の國土であつて、民族又神の子孫でありますために、大君の御稜威と、國土の威力と、國民の大和魂の力が、嚴然躍如として、國土を守つてゐますために、何れの國も日本の國土へは、一步も足を掛ける事が出来なかつたのであります。

神國日本の國威の、無限量たる事は、日清日露の二大戦役に於ても、證明されて居ります。

かゝる神氣充滿する大帝國でありますために、世界の各國も、流石日本には畏れを抱いて、再び侵略的行動に出づる様な事は、憤しむ様になりましたけれども、その代り支那に對しては、いよく猛烈に、魔の手を伸べて、あらん限りの策動を續けて參りました。

滿洲といふ國が、今度獨立して、立派な帝國になつた事は、餘りにも當然過ぎる事で、寧ろ世界人の心が、眞に純眞で、正しいものであつたならば、東洋平和のために喜ばなければならぬ道理であります。

何となれば、支那は迷へる慈心のために、滿洲國を、支那の國土の様に申して、現在も尙、失地恢復などいふ言葉を使つて、さうした運動等を潜行的に行つてゐる者があると思ひます。

又世界各國は、支那を煽動して、日本が保護して、獨立を助けてゐる滿洲國を轉覆せしめて、支那へ取り返させ、その機に乗じて、滿洲國を攪亂して、世界中の支配下

に於て、之を世界の共同所有物として、その力で四百餘州もある支那全土をも、思ふ存分に侵略して、滿洲支那共に併せて、世界の權益に收めて終へば、シヤム國を征服する位の事は、何の造作もありません。

如何に強力を誇る日本と雖も、全く東洋に、共力して國土を守る國がなくなれば、世界の前には、手も足も出なくなつて、羽をもがれた鳥に等しいものになつて、どうしなくとも、自然に國が滅びるといふ、怖るべき計畫に依つて策動を續けてゐるのであります。

滿洲國は太古から、滿洲國であつて、秦の始皇帝の時、蒙古滿洲民族の、侵略を怖れて、之を喰ひ止めるために、あの長い一萬里の長城を築いて、之を遮つた事に依つても明らかであります。

三百年前滿洲に發祥せる、清朝の太宗に依つて、四百餘州は統制せられ、大帝國として、三百年の間、國土を經營されたために、滿洲は支那に併呑された状態になつて

ありました。

けれどもその實は、太宗皇帝の意志に依つて、滿洲は併呑せず、皇室の特別資産として、又寶庫として、之を除外して、治めて來られましたために、滿洲は三百年間もの間、支那の政治を受けた事はありません。

それが今から二十四年前に、清朝は滅び、宣統帝は廢帝となつて、天津の日本租界に亡命されてゐました。

その後支那の國內は、いよく統制亂れ、相次いで戰亂が起り、收拾する事の出來ない程の状態に立到りました。

之と同時に滿洲國にも、馬賊の統領として有名な、張作霖及びその子の張學良等の軍閥が起り、その性質残忍にして、慈悲慈愛の心なく、仁義を好まず、唯傲慾非道な行爲を以て、人民を苦しめ、苛酷な税を取り立て、之を以て我が身の榮耀榮華を極める代とするのみでなく、濫りに軍備を増大して、支那と戰爭を始めたり致しまして

收拾する事の出来ない状態になりましたので、日本も南滿洲の權益を守る事も、却々容易では出来なくなつて、絶えず兩國の暴動を監視しなければならなくなりました。かうした状態にある時、世界各國は、滿洲支那の背後へ廻つて、様々な策動をして日本から滿洲に於ける權益を取返させて、日本を孤獨の窮地に陥れるために、あらゆる手段を取りましたので、支那滿洲共に、その策動にうっかり乗せられて、自國將來永遠の保護のために、一番力強い味方であり、共力者である日本に、敵愾心を持つて、世界各國の手先となつて、日本をあらゆる方面に涉つて、猛烈な排斥を始めたのであります。

これがために奉天の柳條溝に於て、張學良の正規軍が、日本の權益である、滿洲鐵道を破壊した事が、端緒となりまして、我が獨立守備隊として、その任に當つて居りました皇軍が、奮然起つて、北大營の張學良の陣營を襲ひ、之を攻撃致しました。それと同時に各所にある、張學良の軍營を、攻撃致しましたので、敵は散々敗北致

しました。

その中でも逃げ遅れた者は、従來の馬賊と混つて、滿洲國を片つ端から掠奪して、良民を苦しめますので、その慘狀は目も當てられませぬ。

之を見て正義の血湧く日本は、このまゝ看過する事が出来ず、内地からも更に軍隊を送つて、不正な馬賊匪賊を討伐したのであります。

爲に滿洲は、發詳以來始めて、平和といふものが訪れましたので、滿洲民族はこの時とばかりに奮ひ立つて、獨立したのであります。

日本は之を強力な力で、保護したのは當然でございませぬ。

最初日本を窮地に陥れようといふ、誤れる計畫から、策動もし煽動もしました事が結果はその反對となつて、外國文化と思想に禍されて、思想も經濟も精神も、懦弱になつたのであらうと、侮つてゐた日本が、計り知れない強力な力に依つて、滿洲國から、張學良の軍閥は、一舉に驅逐されて終ひ、尙その上滿洲國が、世界一獨立を宣明

致しましたので、張學良及び支那の官民が、驚き騒ぎ慌て出したといふよりも、世界各国が、目の色顔の色を變へて、騒ぎ立てまして、濫りに聲を高めて、「日本横暴」とか、又は「國際條約に違反して、他國の權益を犯した。」などと言つて、鼎の沸くが如く、世論は騒がしくなりました。

そして遂には、日本の申出に依つて、眞の滿洲國の事情を調査するために、英國の學者である、リットン卿が委員長となりまして、各國から委員を選んで、調査のために、東洋へやつて参りました。

それは昭和七年の春でありました。

その結果、このリットン報告書では、

滿洲國は支那の領土である事は間違ひないから、世界は絶対に獨立を認めないこと。日本は馬賊匪賊の討伐を止めて、南滿洲の權益地に、軍隊を引上げること。滿洲へは世界各国から、共同で憲兵を送つて、治安維持をさせるがよい。

といふ様な報告を致しました。

この通りにすれば、支那も滿洲も、完全に世界の管理の手に收められて、自分の權利といふものは、全然失つて終ふ事になつて、事實上日本を残す外、東洋は西洋のために、領土を奪はれて終ふ事になるのです。

地球上に於て、これ程の重大問題がありませんか。

この時に日本は、この問題を解決する全權として、松岡洋右氏を送つたのでございます。

松岡全權は、餘りにも事重大にして、己れの使命の重き事を悟られまして、天地の神に誓ひ、伊勢大廟に祈り、畏くも

陛下の玉顔を拜し奉つて「遠きゼネバに使用しては、聖慮を畏み奉り、臣節を完うして、神國日本の立場を、世界人に知らしめ、國威を世界に輝かさん事を期し奉る。」と誓つて行かれたのであります。

ゼネバへ行かれてから 松岡全權は、晝夜神の御守護を祈願されて、飽迄固く正しき信念を以て、會議に臨まれ、終始一貫東洋の實情、滿洲國の獨立が、將來の東洋平和のために、多大なる使命を有する事、又日本が東洋平和延いては、世界平和のために、滿洲國の獨立を助けたる理由、今後尙進んで行はんとする大信念を示したのであります。元々人種的優越感を以て、東洋を侵略する事をのみ、目的としてゐる西洋人に、如何程正しい眞理であつても、之が理解されよう道理はありません。

理は正しくして、世界人の耳を似せさせましたけれども、最後は地球人類の平和を呪ふ惡魔の禍か、非なるもの、誤れるリットン卿の意見書が、そのまゝ、議會に現はれて、日本の立場を一切葬つて、誤れる報告書に基いて、東洋を世界が侵略しやうといふ、案を通過させやうと致しましたので、松岡全權は、日本政府の命令を仰いで、敢然としてその席を立つて、委員を纏めて、引上げて來られました。

續いて昭和八年三月、國際聯盟に向つて、日本は脱退する事を通告致しました。

これがために、世界も條約に依つて、日本の行動を阻止する事は出来ませんので、地團駄踏んで、口惜しがつて見ましても、日本の力を止めて、自分達の目的を達する事は出来ませんので、經濟的に日本の國が衰へる様に仕向け、一方では武力に依つて日本の力を取除くより外仕方がないといふ様な考へを持つてゐるのは、當然であります。

新聞等に、相當力のある人の意見として、戴る場合は、いつもそれに依つて、思想が動いて、好轉したとか、惡化したとか申されますけれども、大勢から見れば、さうした小さな、人工的の動きなどは、まるで秋の空を流れる雲の様なもので、少しも當てになるものではありません。

實際に於ける東洋の現状は、日本に取つて、實に容易ならぬ状態になつてゐます。日本は過去二回に涉つて、アメリカとイギリスと共に、海軍の軍縮會議を開きました。だが、二回共理由なくして、國防上重大な力を持つ海軍力を、英米よりも四割も低い

比率にされてゐます。

ために國民は長い間、非常な不安を感じて参りました。

その條約された日も、西曆一千九百三十四年に満期になります。

この間五年六年が、日本では一番海軍力が弱くなる時で、英米は反對に立派な軍艦を、充分造り上げて終ふ時です。

勿論三回目に開かれる軍縮會議では、絶對平等を主張して、之が貫徹に邁進するに決つてゐますし、萬一之を英米が認めない場合は、左様な不合理な條約などは結ばないで、解散すればよいのですから、別に會議そのものには、心配ないとしても日本の様に、四面海を以て圍まれた島國で、海軍力が世界の強國より弱いといふ事は、何とすることも心配な事でありませぬ。

今一つは昨年三月、國際聯盟は脱退しましたけれども、二年間はその義務がありませぬが、昭和十年三月は、その義務年限が終つて、全く日本は世界から、自由独自の立

場になります。

これは解釋の致し方で、よいとも悪いとも、斷定をする事は出来ませんが、今日迄の行掛りから想像して見ますと、歐洲大戰の時、日本の力で占領致しましたドイツの領土である、南洋諸島を、世界の共有物として、日本は委任されて、統治する事に、形式上は條約されて居ります。

日本の統治して居ります南洋諸島は、日本の經濟上にも國防上にも、重大な使命を持つてゐる、大切な島でありますから、之を日本から奪ひ度いと望んでゐる國が澤山あります。

この國を奪ふといふ事は、即ち日本の手足や羽をむしり取つて、日本を滅亡させる一番手近い方法であるからであります。

爲にこの聯盟脱退をした事をよい事にして、委任統治だからといふ口實で、日本に南洋諸島を、聯盟へ返せといふ様な、無法な要求をしないとも限りませぬ。その時に

日本は、嚴然として「返さない」と、はつきり斷るでせう。
斷られて世界が、

「さうですか。御尤もです。日本に取つては大切な島だから……。」
と從順に手を引く筈はありません。

そんな時を想像すれば、容易ならぬ事件の起る事を、覺悟しなければなりません。
アメリカ、イギリス始め、ドイツ、フランス、イタリー等我負けじと、陸軍、海軍
空軍を、擴張に擴張して、軍備を増大します。

口實はお互に自分の國を守るためとは申し乍ら、結局は東洋、西洋の人種の戦ひの
ために備へてゐるのが事實であります。

ロシアは又、數十年前に東洋征服の野心を抱き、滿洲を占領して、神意に觸れ、神
國日本の精銳なる皇軍に依つて、滿洲を奪ひ返され、無残にも敗北して、北滿の國境
の方へ驅逐され、無念やる方なく思つて居りましたが、世界戦争の時に、國內に大革

命が起り、一時統制が亂れましたが、今は共產主義を理想として、國號をソヴェート
聯邦と改めて、國民を限りなく犠牲にして、その汗と涙を搾り取つて、軍備を擴張し
て、怖ろしい勢で自國國力の恢復、世界統制を計畫して、永い間策戦して參りました。
西洋へも東洋へも、強力な共產運動を行ひ、武力に先んじて、思想政策に依つて、
革命の魁を行つたのであります。これは大體に於て、或一部分を除く外は失敗に終
りました、けれども、

ロシアは今、永年の怨みを持つてゐる日本が、世界と大衝突をし、支那と立場を變
へて、争つて居るといふ、日本に取つては、實に容易ならぬ困難な事情に立つてゐ
る時、滿洲は日本が、強力な力で援助して、獨立せしめ、清朝の廢帝を天津から邊へ
て、滿洲國皇帝として御即位せしめて、滿洲國一體に仁政を布かれ、旭日昇天の勢
で、滿洲國が伸び上りつゝあるために、長い間折あらば、勢力を盛り返して、滿洲國
を我が手に奪ひ返し、東洋侵略の手を伸べやうと、よき機會を睨つてゐたのに、それ

も今は儚ない夢となつて、満洲國の力が、國內の隅々に迄満ちて來ると共に、靈國の勢力は、次第に國境から驅逐されて終ひます。

爲にいよ／＼憤慨して、滿洲の背後の力である日本を憎み、何ぞかしてその偉大な勢力を倒して、滿洲支那を奪ひ度いと策動して見ましても、到底日本の神秘不可思議な力に當る事は出來ませんので、唯躊躇して焦るばかりでありました。然るに

現今では歐洲各國とは、今後絶対に戦争しないといふ、不可侵條約を結んで、これで歐洲各國とは、何等心配ない様にしておいて、廣大な軍備その他の力を、全部滿洲國に近い東洋の方へ移して、一生懸命で何事か策戦を進めてゐるのであります。

滿洲とロシアの國境には、既に三十萬餘りの軍隊が、精銳な武器を携へて、待機してゐるのであります。

支那は又自國の力では、到底日本の足許にも寄れない事を觀念して、今は不氣味な程、從順な態度を示してゐますが、日本が軍縮會議や、聯盟脱退等に依つて、世界と

一大衝突を起して、軍事行動が始まれば、米國、ロシアと相提携して、日本に當つて目的を達しやうといふ様な夢を見てゐるのです。

萬一米、露、支を相手にして、日本が戦ふ場合は、勿論歐洲各國も傍觀してはゐません。

必ず日本を敵として、當つて來る事は必然であります。

かやうに考へます時、今日日本は世界各國の國防を、單にロシアとかアメリカとか、支那その他各國の獨自の力であると考へる事は出來ません。

世界總べての軍備に對する日本の軍備として備へなければならぬ事は、當然ではありませんか。

かやうな容易ならぬ事情に立到つてゐる、神國日本とその民族が、この重大性を他所事にして、小さき立場から、利害關係等に、こだはつてゐるべき時ではありません。君臣一體にして、畏くも至上は、

「國を以て家とし、民を以て子とす。」

と宣はせ給ひ、民は君を父と思ひ、皇室を大宗家と尊ぶ所の、一大團結の國家であります。

いかでか、君國の安泰なくして、自己の繁榮は望まれませう。

祖先の徳を尊び、子孫の繁榮を願ふならば、何をおいても、先づ君國安泰を先に計らなければなりません。

それには今日の状態では、國防充實第一主義で行かなければなりません。

神國日本は、神の國でありますから、正義を尊び、平和を愛する民族でありますから、徒らに軍を起して、世界人類に向つて、戦を挑むといふ様な事は、絶対に致しませんけれども、世界各国の人が、その魂を、悪魔に禍せられ、傲慾非道飽なき暴舉に出で、己が誤れる野心を恣にせんがために、満洲及び日本に侵略しやうとする場合は、天に代つて之を打懲し、その禍の根を断たなければなりません。

之がためにのみ、國防は絶対に必要であります。

戦争をして、敗北したならば、取返しつかない事になりますから、絶対に負けてはなりません。

必ず勝たなければなりません。

けれども假令大勝利を得たとしても、罪なき人類を澤山失ひ、神様のお恵み下さつた、尊き地上の天恩物を破壊する事は、神様への畏れもありますから、戦争を避け得られるものならば、如何なる方法を取つても、避けなければなりません。

戦争を千度して千度勝つても、眞の勝ちではありません。

戦はずして、眞に敵を征服して、平和に導く所に、眞の勝利があるのであります。日本が今後眞に尊くして正しき主義を持ち、絶大な品性人格に依つて、世界人の野心を征服して、日本精神の前に心服せしめる事が出来たならば、戦争といふ禍から逃れて、世界を救ふ事が出来ないとも限りません。

けれども之には、眞に偉大なる、日本國民の、正義人道に立つ、人格の力と、日本の武力の前には、到底當る事は出來ないといふ觀念を、世界人に起さしめるだけの實力が、日本に備つてゐなければ、その目的は達せられませぬ。

かく考へます時に、和戦何れども、備へる道は、國防の充實と、國力の萬全とであります。

「備あれば憂なし」といふ言葉がありますが、全くその通りでありまして、何事につけても、平常充分に備へておけば、如何なる事が起りましても、憂ふる事はありません。泰然自若として、必勝の信念を以て進む事が出來ます。

國防はこのためであります。

戦争がないのに、無益な事に、多額の費用を投じて、軍備を擴張するなごといふ事は、過つてゐるなごと言ふ人が、今日の日本にあるとしたならば、實に大局を知らない、不明な人と言はなければなりません。

かゝる重大な時であるがために、畏くも

陛下におかせられては、政黨超然内閣でありました、齋藤内閣の後に、再び超然内閣に等しき、岡田海軍大將に、内閣組織の御大命を下され、國家の非常時に對し、九千萬國民の精神を、強く尊く清く統一し、その生活の基礎を安定して、國力に備へると共に、陸海空共に、國防を充實して、世界に備へて、祖國の守りを嚴にするのみならず、東洋の國土を確守して、世界を平和に導けとの辱けなき御聖旨に外なりません。かゝる重大な時に臨み、政治家、教育家、宗教家、實業家、農家、その他何れの職に身を置く者も、かゝる國狀をよく承知致しまして、日々己が天職のために、至誠一貫、正しく清く誠の道を踏み修め、尊き汗と涙を共に、君國のために獻げ、徳を積んで、萬一の場合のために、充分活躍し得る、總べての用意を貯へなければなりません。

總べての徳と力の基は、皆清くして強き心身であります。

お互に使命の重大化と共に、天から與へられたる、自己の心身を、よく清め強く鍛へて、自己自らが金銀財寶等と比較すべからざる、絶對的國寶となつて、御天業のために、捧げる事が出来るやう、心掛ける事が大切であると思ひます。
爲に大神様の御神示と觀念致しまして、この言葉を述べさせて頂きました。

聖上と皇軍

終りに臨みまして、聖上と皇軍に就て、お話を致します。

世界各国には、神ながらの聖天子に依つて、その國を治められてゐるものはありませんために、國體の組織が、國民の勢力に依つて動いて居ります。

ために政治に政黨あり、軍に於ても軍閥がありまして、同じ國內にあり乍らも、立場を變へて、相争ふ事も止むを得ません。

然るに日本は、神代の時代から、君臣の分が明らかに定められて、一天萬乗の聖上陛下の御手に依つて、國土を知ろしめし、民草を治め給ふ、清淨なる神國でありますために、政治と軍も、皆陛下の御稜威に依る御親裁でございますために、臣下は心身を清めて、真心一筋の觀念に依つて、御天業を翼賛し奉り、臣節を完うすべきものであります。

爲に政黨派等を立て、私心のために君國を疎そかにして、國法を犯し、横暴を極むる如き、不正不忠な政治家等のある事は、絶對に許すことは出来ません。

かゝる者が今後世に現れた場合は、國民は奮ひ立つて、その禍を未然に防がなければなりません。

同時に軍隊も亦、陛下御親ら御統制に當らせ給ふものでありますから、軍閥などいふものは、絶對にあるべき道理はありません。

徒らに聖慮を畏れぬ、信念薄き者の偏見から、たま〜軍閥云々等の言葉を、無遠

慮に發するは、實に神にも聖慮にも畏れ多いと思ひますから、慎しむべき事であると思ひます。

九千萬の國民が、國家に一旦緩急あれば、君國の御爲に、水火の中も厭はず命を捧げて報する事を無上の光榮としてゐる所に、日本精神の無限なる力が潛んでゐるのでございませう。

畏くも聖上陛下は、神に在しますがために、この國民の魂を、常に御支配遊ばされ之を御せられてお出で遊ばすのでございませう。

君臣相通する、無限なる大信念の中へ、如何なる者の介在も許す事は出来ませぬ。之がためにこそ、我が日本神國の軍隊を、皇軍と唱へ、又神軍と怖れられるのであります。

皇軍が、正義の利劍を揮つて進む所、悉く敵を滅亡せしめるのも、宇宙の大元靈に在します、大祖神の威靈を受けて、神の心を地に行ふからであります。

神は唯正義を行ひ給ふのでありますから、正義なき所に、榮光は輝きません。

幸ひにして、神國日本は、神に選ばれたる、正義の元靈國でありますために、國民にしてその觀念あれば、全世界の軍隊に對しても、傲も怖れる事はありません。

皇軍の威嚴は世界に赫々として輝く事は、言を俟たぬ次第であります。

唯悲しむべきは、神國民族と生れ乍ら、不幸にして、惡魔に禍せられ、自我煩惱の慾心に眼眩んで、神の道に背き、人の道を踏み誤れる者は祖神の尊き御心に依りて、滅亡する時が近づいた事でありませう。

お互に私共は、我が胸に手を置いて、我が心の生活と、日々の行動を省みまして神の心に背き、君の赤子としての道に、誤つたと氣付きましたならば、一刻も早くその行を改めて、誠から神の御心に叶ひ、臣道に叶ふ忠實な國民となつて、生命の生死を超えて、永遠の生命を與へられる事を、只管に願はなければならぬと思ひます。幸ひにして、御參集下さいました皆様方に、神の御心と、國家の現状と、御自身の

使命といふものを、よく御承知が願へまして、將來各々お受けになりました御天職を完うされまゝ、榊の一端となりましたならば、この上もなき光榮と存じます。

數時間に涉りまして、靜肅に御聴き取り下さいました事を、深く感謝致します。

萬壽華會

三時間餘に渡る講演の間に、不思議にも直代は、前に備へつけてある、水に手も觸れず、體も微動だにする事なく、直立不動の姿勢の儘、何處から溢れて出るのか分らない涼しい聲は、近き遠きの差別なく、二千人に餘る聴衆の心の耳に泌々と響いて、體内に溶け込む様に感じさせました。

その間森として咳拂ひ一つも聞えませぬ。

全く聴衆の眞心は、この大信仰的信念である、萬壽華の中に吸ひ込まれ、その匂の

中に陶醉したのであります。

講演を終つて、壇を降りやうとする時、今迄堰止められてゐた水が、堰を切つて落された様に、嵐の様な拍手は、ごつと場内から起りました。

その時突如として、右側の來賓席から、飛出して來た紳士がありました。

夢中で兩手を上げて、聴衆の拍手とごよめきを鎮める様に、

「諸君、暫く御靜肅にして下さい。御相談があります。」

この際即刻に御協議致し度い事があります。」

會場の聴衆は、驚いてよくその人を見ると、それは和歌山縣選出の代議士として、智能才幹政治的手腕等、あらゆる點に、卓見を持ち、縣下の人望を一身に負うて立つてゐる、飯島國彦氏であります。

人々は何事かと、異様の眼を輝かして、鳴りを鎮めると、飯島氏は、降壇して控室に引取らうとする直代を呼び止めて、壇の下に戻らせ、自分は壇の上に悠然と立つて

「諸君、私が突然に此處へ上りましたのは、外ではありません。

只今諸君がお聞きになりました講演は、元來各所にその道の大家が、自己の意見として、發表されました様な、一遍の講演ではなく、之實に人類の生活様式の根本を改め、萬物の靈長として、生み下されたお互の人の子が、現在の如く、自我の煩惱心に禍されて、お互に奪ひ合ひ、争ひ合つて、爲に自他の心身を害ひ惱まして、淋しき暗き冷き生活を繰返すといふ、矛盾した制度を改めて、眞に人間同志が、神の洪大無邊なる恵みを受けて、神の心の如く愛し合ひ恵み合ひ、慈しみ合ひ助け合つて、共に明るく朗らかに、幸福に健全なる心身を以て、共に光榮ある人間生活を營ませるためのうるはしい地上世界建設のために、現れ給うた神の聲であります。

昔の諺に、「天に口なし、人を以て言はしむる。」

といふ事がありますが、實にその通りであります。

かく拜見した所、里見直代といふこの婦人は、何處として普通の人と變つてゐる點

を見受ける事は出来ませんけれども、その魂には、實に洪大無邊なる祖神の御靈の宿り給うて、我々のために齊しく人の道をお諭し下さいましたものである事を確信致しまして私は終始一貫感激致した次第であります。

今のお話は總て皆、學理を離れたる、實際の眞理でありまして、之は悉く實行すれば、忽ちに偉大なる、効果の現れて来る、眞實の事柄であります。

今や國家内外の情勢は、未曾有の國難に遭遇して居ります。

この非常時に當つて、九千萬の國民は、老若男女を問はず、舉つて君國のために、又東洋及び世界平和のために、力の限りを盡さなければならぬ、重大な時であります。

この時に當りまして、千萬の議論も學説も、何の役にも立ちません。

唯國民の眞の偉大なる大和魂と、それに依つて活躍すべき、心身の絶對健全であるといふ事が、最も必要であります。

かゝる時に、かゝる奇蹟的に、天意が人を通じて現れた時、それを我々が心の耳ではつきり聞取つて、自覺致しながら、それをこのまゝ聞き逃す事は出来ません。

廣く全國民同胞のために、隈なくこの神の御聲を賛え傳へて、國民精神を喚起して頂くために、我々は今日茲に集つた者が、後援者となりまして、里見女史のために、後援會を組織致し度いと存じますので、諸君に御賛成を頂き度いと思ひます。」

「賛成、賛成。」

「同感です。賛成致します。」

「國家非常時打開のために、是非御奮闘をお願い致します。」

と思ひの賛成の聲が上ります。

飯島代議士は、満足氣に、興奮した顔を微笑ませて、

「御賛成下さつて、有りがたうございます。」

それでは里見女史が、不思議な御因縁に依つて、祖神からお授かりになつたといふ萬壽華を、そのまゝ隈なく地上に移し植えて、萬物を祝福して頂くために、その華の名に因んで、萬壽華會といふのを組織致しまして、我々各國體が、眞實の力で、御後援申上げる事に致し度いと思ひますが、皆さん如何でございませうか。」

と提案しますと、又嵐の様な賛成の聲と拍手が起つて、會場は轟々として拍手と大衆の聲で唸つてゐます。

飯島代議士は、直代に向つて、

「只今お聞きの通りでございますから、貴女が今後君國の非常時打開のため、又世界人類を祝福して下さるために、神の道を隈なく説き明して頂きます様、光榮なる前途を御後援するため、本日因縁があつて、お集り下さいました方々に依つて、萬壽華會を組織して、今後貴女の御宣布をお助け申上げ度いと存じます。僞らざる純眞なるこの至誠を、お受け頂き度うございます。」

と挨拶されると、直代は静かに、再び壇上にあがって一禮すると、
 「洪大無邊なる祖神の御心を、親愛なる人類同胞に、隈なく説き示し、住みよくうる
 はしき社會を建設せしめよとの、思召に依りまして、萬壽華會を組織して頂きまし
 て、今後皆様方の、真心からなる御後援を賜りますとの事を承つて、唯感謝の外
 はございませぬ。

唯人類の平和と、萬物の幸福を、御祝福下さいます

大神様と主上陛下と、親愛なる皆様方の御思召に報ひますために、今後は一層身を
 清めまして、與へられました使命のために身を惜しみなく捧げまして、天命を完う
 致す覺悟でございますから、よろしく御後援の程をお願い致します。」
 と述べてから、淑やかに一禮して引退つて行く後から、又も感激に満ち溢れた拍手は、
 大波の様に送られて、聴衆はいつまでも、解散しやうとも致しませんでした。

親心子心

直代が幾分上氣した氣持で、控へ室へ歸つて参りますと、來賓者は先を争うて、直
 代を取り巻いて、

「やあ、ごうも御苦勞様でございました。

實に結構なお話を承つて、お互に今日この我が心を反省して、思はず膏汗をかき
 ました。

全く今迄は、自分の事は棚に上げて、人を批判しやう、缺點を暴いて之を改めさせ
 やうといふ様な、間違つた考へを持つてゐましたから、いけなかつたのです。

その反對にお互が、己を正しくして己を改め、己が國家社會に、捧げるといふ事だ
 けを考へて、心身共に健康に鍛へて力を盡せば、全く住みよく、平和な世の中にな

るのです。

人の世はごうしても、勝手に人が造つた、無理な法律などにこだはつて、得手勝手な事を言はない様にして、真理である、神の法則に則つて、行かなければいけません。

「さう／＼。全くさうです。」

政治も教育も宗教も、實業も農業も總てが、今迄に考へて來た、又行つて來た原則を改めて、自然真理である、神の法則に、總べてのやり方を變へなければ、これ程社會改造を叫んで見ても、理窟を言つて見ても、眞の理想社會なんて、出来るものではありません。

今日のお話、學說理論を離れて、全く實際の眞理をお説き下さつたのですから、神様からのお諭しと、眞から觀念して、反省が出來ました。」

と、名士達は、口々に激賞するのですが、直代は唯微笑んだ儘で、何とも答へず目

禮して、うなづいては、その好意を受けてゐました。

その時突然高木署長は、

「里見さん、貴女に是非逢つて頂かなければならない人をお伴れしました。」

直代は訝しく思ひ乍ら、椅子から立上つて、

「誰方がお訪ね下さつたのでございませうか。」

と振向いて見ると、そこには忘れやうとしても、一瞬も忘れる事の出來ない、七年前故郷に残して出た、懐しの生みの父と母とが、涙を浮べて立つてゐます。

直代は吃驚して、

「おゝ、お父様、お母様。」

「おゝ、直代、よく無事でゐて呉れた。」

と父が先づ言へば、母の民枝も我を忘れて、

「直代、お前はもうこの世にゐないのかと思つたのに、よく生きてゐて呉れました。」

そして神様から偉い力を授けられて……。」

とそれ迄言ふと、後は言葉が出ません。

直代はたまり兼ねて、

「お父様、お母様すみませんでした。」

永い間御心配かけました。」

「そんな事があるものか、お前が無事でゐて呉れただけでも嬉しいのに、かうして偉い方々からも賞められ、あんな澤山の人達からも、感心して頂ける様な力を、神様から本當に授かつたのかと思へば、親としては餘り嬉しいやら、勿體ないやらで、泣いて聞いてゐたんだよ。」

「ではお父様やお母様は、前から此處へ来てお出でになつたのですか。」

「来てゐたとも。」

五日も前に飛んで来てゐたのだが、署長様が、今日の講演がすむ迄は、逢はせる事

は出来ないと仰つたので、お前の着てゐる小袖だけは、今日着せて頂ける様にお願ひしておいて、今日迄宿に、一日千秋の思ひで、逢へる時を待つてゐたんだよ。今日お前があゝの壇の上立つた時、お母さんは人目も忘れて、聲を出してお前を呼びさうだつたから、私は吃驚して、注意して聲を出させなかつたよ。」

「さうでしたか。」

そんな事は一向存じませんでしたので、本當にすみませんでした。」

お父様やお母様が来てゐて下さるのが分つたら、先に一目でもお目に掛るのでしたの。」

高木署長は、それを遮つて、

「それは私が逢つて頂かない様にしましたのは、折角の講演が、親子兄弟の恩愛等のために、幾分でも感情的に妨げられては、面白くないと思ひましたので、塵程も私的の感情を交へないで、天に代つて、唯一意専心人の道を説き明して、晴れの社會

改造運動の第一歩を、力強いものに致し度いと考へた、私の信念からであつたのでございませう。」

「よく御厚意は分つて居ります。」

唯感謝の外はございませぬ。

何に致しまして、この度は大變なお世話様になりました、お蔭様でこれの念願も達せられて、世に出てお國のために盡させて頂く事が出来まして、この子は定めし本望でございませう、自分等は無力な者でございませうが、親と致しまして私共は、真に喜びに堪へませぬ。」

父の隆藏が涙含んで感謝の言葉を述べる後から、民枝も涙含んで、

「親としては、この子がそんな考へを持つてゐることは分りませぬ。」

普通の娘達と同じ様に思ひますので、年頃になつたら一日も早く、よい所へ縁づけ、初孫の顔を見て楽しみ度いと、そんな事ばかり考へてゐましたのに、突然家出

なごを致しましたので、唯もう心配して、ごうかして命があつて歸つて來る様にと一日も神様佛様にお願ひしない日はありません。

せめてこの子が、お嫁入りの時に着せようと、作りました、小袖をこの子と思つて眺めてゐましたが、この度この子が生きて居りまして、こちらで大變なお世話を受けて、晴の會場で、講演をさせて頂くといふ事を承つて、唯もう氣も狂はんばかりに夢中になつて、この小袖を抱へて飛んで參りました。

井程會場で、これがこの着物を着て、あの壇上に立つた時は、私はもう嬉しいと言はうか懐しいと言はうか、言ひ様もない心持で、泣いてばかり居りました。

お嫁入りの衣裳には役立たないこの小袖が、お國のためにお盡しするといふ晴やかな首途の晴衣に役立つたかと思へば、親としては唯もう嬉しくてなりません。」

と思はずその場へ泣伏しました。

直代も母のその様を見て、思はず母の膝に取り縋つて、聲を惜しませむせび泣きま

した。
周りを圍んでゐた人達も皆、等しく親子の盡させぬ思愛の情に絆されて、涙を呑むのでした。

その二人の道座談會

直代は全國を、神の道宣布のために、巡講する中に、各所の青年團、處女會、婦人會等の求めに應じて、人の道座談會に出席致しました。
今日しも某男女青年團の求めに應じて、若き人々のために、真心から問はれるまゝに、人の道を教へ諭すのでした。

神と信仰

問 「私は固い信仰を持つて、強く生き度いと、いつも思ひますが、どう致しましても

神様の御存在に就て、疑ひを生じまして、はつきりと神様に對する信仰を掴む事が出来ません。

現實の世界以外に、神様といふものが、存在されてゐるものでございませうか。若し神様があるとしたならば、どんなお姿であつて、又どんな力を持つてお出でになるでせうか。

神様が絶対に大愛の徳を以て、總べてのものをお慈しみ下さるものであるならば、世の中に病氣をしたり、災難を受けたり、働いても／＼貧乏して苦しむ者の、出来る様な答はなく、みんなを仕合せにして下さる答ではないかと、こんな事を私は時々思つて見るのでございます。

こんな事につき、先生のお考へをお伺ひ致し度うございます。

答「神様のお姿を、目で見やうの、又そのお聲を、耳で聞き度いなどいふ事を、お考へになる事が、既に間違ひでございます。

凡そ人間の持つ知能や、之に依つて學んだ學理の力等では、絶対に尋ね求めて知る事の出来ない世界、例へて申しますと、土も水も空氣も太陽も月も星も、肉眼で見、手に觸れて感じる限りのものは、人の力で分析して、その原理を知る事が出来ませんが、そのもとの原素を誰が造つたかといふ事になると、皆目分らないのであります。

それでございますから、分らない世界の、絶対不滅の元宇宙の大靈が、神であります。

萬物の親であります、宇宙の大靈が、不滅なる大自然を生み、又有より空に、空より有に、千變萬化して、止る事を知らない現實の社會の變化をも、自由に行つて居られます。

人の生活に、幸と不幸の現れるのは、その眞心に神を知り、畏れて身を正し、心を淨めて、神の道に準し、誠を行ふものは、心身も健やかに、過ち禍なく、日

々の生活を、祝福されます。

不幸になる者は、大いなる慈しみの御親神様の、御存在を知らずして、小さな自我煩惱に迷ひ、唯徒らに、目の前の事にのみ、眼が眩んで、偽り貪りの行、愚痴不満、不平、怠惰等の罪を犯して、知らずくの間、神意に背き、天恩物である、己が心身と、總べての物を、粗末に取扱ふために、己が身の犯せる罪に依つて、己が身に悩みを受けるのでありまして、決して神様の御業ではありません。

大悲大愛の神の御旨から離れた、空虚な心身を、病魔禍といふ魔神に、占領されて、心ならずも罪を犯し、願はざる病の禍を受けるのであります。

人は總て、御祖神の御尊嚴を畏みて、正しく誠の神の道を踏み行ひ、常に神の如く、自己には求むる事なく、他に向つては、無條件にて、慈悲慈愛の慈しみを施し、美しき愛、汗、涙を總ての者に惜しむ事なく捧げて行く者には、計り知れない心身の喜びを興へて、不滅の榮光を興へられるのであります。

神の道は誠であり、正義であり、愛である、この徳を周圍に施す事でありませう。

之に依つて、周圍に誠からなる、人情の花咲き薫り、自己もその中にうるほされて、祝福されるものであります。

真心をこめて植えなば世の中に

花の育たぬ里なかりけり

親子

問「西洋の宗教では、多く神様を尊びますけれども、祖先を尊び祀るといふ様な習慣は少ない様でございます。

殊に親子の關係でも、親は子を生み育て教育するのに、大きな義務を負ひますが子は親の老後を養はないといふ様な、風習がある様でございます。

日本では祖先を尊び、厚く之を祀り、又親に孝行を盡すといふ事を、人の道の最も大切な事とされて居りますが、之は昔からの習慣がさうさせたものでせうか、又は實際に親を、大切にしなければならぬ義務があるでせうか。

私は時々その事に就て疑問が起つてなりません。

その事について御説明をお願い致し度いと存じます。

答「西洋の人達が、神のある事を知つて、それを畏れ、祖先の恩を感じて、之を祀ら

ない、ましてや我が肉身の親に對して、真心から孝養を盡さないで、親の子に對する義務だけを盡させやうといふ様な風習は、全く神の道に反するのみでなく、人の道を誤てるも、之より大きなものはございません。

神國日本の民族が、神を畏れ祖神を尊ぶと共に、我が祖先を敬ひ、祭事を嚴かにすると共に、その親を慰さめ、孝養忘りなき行は、誠から神の道に叶ひ、人の道を完うするものでございます。

何故に祖先は尊いかと言へば、それは祖先の血を享け、肉を受けて、生命をこの世に得てゐるからでございます。

親の尊ごきは、何故かと申しますと、大からも我が子からも、頼まれもせず、我からも依頼も望みもしないのに、神様から選ばれて、その子の親となつたからであります。

それがために、子供の胎内にゐて、發育する間も、その肉その骨血の一滴、一本の毛髪の組織にも、手を觸れる事は出来ません。

全く神様の御力に依つて、嚴然として組立てられて行くのでございますが、親はその子の父となり母と選ばれたる事に依りまして、如何なる力を以てしても、抜き取る事の出来ない、神と等しき慈悲慈愛を以て、生後のその子の養育と教育に當ります。

之親自身が求めたものではありませんが、神様がその子を、完全に育てるために

親と定めたる者に、慈悲慈愛をお授けになつてゐるからであります。」

問「それならば、總ての人の親には、同じ様に平等な慈悲慈愛があるべきでございませうが、世の中には、生みの子の爲に、慈悲慈愛を以て、慈しみ育てる所か、残忍極りなき行をして、その子を苦しめ、惱ませて、野獸にも劣る様な、行をする者があります、それ等はどんな風に考へたらよろしうございませうか。」

答「御尤もな御尋ねでございます。」

仰せの通り世の中には、慈悲慈愛どころか、誠に無慈悲で、残忍な行を、生みの子に對してしてゐる親もありますから、さうした疑問の起る事は、御尤もな事であると思存します。

さうした矛盾した行爲が行はれますのは、全くその親となる人が、色々な過去の因縁と境遇に禍されて、神の子としての、魂が麻痺して、世の怖るべき雑念と悪魔に禍されて居りますために、神様から受けた、慈悲慈愛は、はつきり與へられて

おましても、外部の自我傲慾の煩惱心のために、覆はれて終つて、強く正しく働きますために、生みの子に對しても、残忍な行爲となつて現れます。

それ程の人は、總ての社會に對しても、傲慾残忍な行が多くて、人の道を誤つて常に自他共に苦しめてゐます。

かやうな親を持たれた子程、眞に深く神を知り、強く信じて、己れの靈光に依つて、肉身の親の邪念邪心妄念を取り除いて、本心を救ひ出して、大悲大愛の神の御旨に還らしめて、眞の人の道に、救ひ出すのが、子の道であります。

人の道を踏み外して、自我煩惱の亡者になり切つてゐる親を持つ人ほど、一層強く固い、信仰的信念を以て、神様に近づき、その御靈光を得て、肉身の親の心を先づ第一に救ふといふ事を考へなければなりません。

親が親らしい眞心を以て、子の爲に慈しみ育て、呉れないから、親に對して孝行を盡す義務はないといふ様な考へを持つ人があるならば、己れも亦親と同様に、

神の御旨を離れて、人の道を過つて、永遠無明の闇路に迷ひ入る、淺間しき經路を辿つてゐるものと知らなければなりません。

假令世界に、何億の人がありましても、親と呼び子と呼ばれて、眞に慈しみ合ふ事の出来るものは、外にはありません。

之を思へば、親子の關係の親しさ、又嚴肅さは、絶對無比のものでありますから子としては、假令その親が、學力、名譽、地位、財産などの、有る無しに係らず天命に依つて、親子の因縁を結んで頂いた、尊い肉身の親様でございますから、神に選ばれて、神に代つた表現でありますから、親に向つては絶對無條件で、只管生神様として、その體を養ひ、その心を慰さめて、よく仕へなければなりません。

この行の正しい事が、神様への絶對なる、信仰となるのであります。

それでございますから、昔から孝は百行の基と申しまして、親に眞心から孝養の

盡されない様な人間では、世の中の爲に、何一つも出来ないものだと言はれて居ります。

問「子として親に仕へる道は、よく分りましたが、親が子に對しては、どういふ考へを以て當るのが本當でございますか。」

答「子が親に對して絶對崇敬の念を持つ様に、親も亦子に對して、敬愛の念を持たなければなりません。

何故なれば、その子を生むために、己れは親として、神から選ばれたものであります。

爲に若し己れがその身弱く、又心が邪で、偽り貪り傲慾の心深く、愚痴不満不平品行の行が、心身の生活にありましたならば、折角神様から與へられたるその子に影響する事は、その子の體内にある中、又生れ出で、から後を問はずその生活に感化影響する事は、偉大なものであります。

それがためにその子が、性格暗く、陰険にして、身體虛弱であつて、世を害し、人を損ひ、己れも日々の生活に、悩み悲しみの逆境に多く住んで悩むも亦、その心身共に健やかにして、性格开朗らかにして明るく、勤勞を尊び、正義を行ひ、知らず／＼の間に、正しき人の道を行ひ、社會から深く信頼され、自己も常に明るき神の榮光を受けて、人の道を誤らず、感謝報恩の生活が出来るのであります。之即ち神が我に與へ給うた生みの子が、神の御心の如く、國寶の如き存在となつて、社會をうるほすか、禍の種となつて、人の世を害ふかといふ、實に大切な事でございますから、人の親となる者は、身分、地位、財産、學力等の有無に係らず、その生みの子の完全なる成育のために、我と我が身が、總べてのよき教への鏡となつて、絶えず強く深き祈りをこめて、神に念じつゝ、その心と體とを、健やかに育て、國寶として、神と君と社會のために捧げるのが、眞の親の道でございます。」

たらちねの庭の教へは狭けれど

廣き世に立つ基とはなる

結婚と配偶

問 「私共此處に集つて居ります者は、皆現在では獨身でございますが、應ては皆結婚しなければなりません。

この中の誰でも、皆お互に理想がございまして、よき配偶者を得て、成るべく幸福に、意義ある家庭生活を営み度いと、望んでゐる人達ばかりでございます。それでございしますのに、實際の世の中を見ますと、餘りに若い未婚者の私共の描いてゐる、理想とは反對に、幻滅の悲哀を感じてゐる人達が、多い様に思ひます。一體結婚といふ事は、ごういふ事を原則として、行ひましたならば、眞實の理想

的な結婚生活が行はれますのでございませうか。

それをはつきりと、教へて頂き度うございませうか。」

答「大變結構な御質問を受けました。」

本當に結婚は、總べての人の幸不幸の原因となるのでございませうから、餘程確固たる信念で、過ちのない縁組をしなければならぬものでございませう。

それが今仰有る様に、若い未婚者の時代は、色々と華やかな、麗はしい理想を描いて居り乍ら、結婚されてからは、間もなくさうした美しい、憧憬の幻は打碎かれて、結婚生活の惱ましさを、煩はしさを、嘆息する様な事になる方の多いといふ事は、御本人のみでなく、その家庭のためにも、子孫のためにも、延いては國家のためにも、誠に容易ならぬ、悪影響を及ぼしますから、今後の若い皆様方は、過去に於ける幾多の先輩又、祖先の生活を省みて、誤つてゐると感じた點は、假令幾千年幾萬年古來の風習であつても、之を敢然と改め、自然眞理にびつたりと

適應する様な、結婚をして頂かなければなりません。」

問「眞理に適合する結婚と申しますと、ごういふ原則を申すのでございませうか。」

答「過去に於ける、先輩や祖先の結婚生活を見ますと、多くは結婚の條件を、物質と對照してゐた傾向が多いと思ひます。」

一例を申しますと、田地とか資産とか、地位名譽又は、釣物の多い少い、といふ様な點に重きをおいて、双方の釣合を考へて、物質の力が、主なる條件となつて結婚談が始まるといふ様な事が多くて、双方の人物の健康、趣味、性格教養といふ様なものを、第二に考へてゐた様でございませう。

これでは全く、結婚の標準が、反對でありますから、理想的な結婚が成立する筈がないのでございませう。

世の中に目に見えるものは、塵一つでも、人間の造つたものではなく、皆神様のお造りになつたものでありますから、誰にしても、我が物と斷言し得るものは、

絶対にならないのであります。

それでございますから、絶えず動いて、定まるといふ事はありません。

さうした浮草の様な、大空の雲の様なものを、目當てにして、結婚の條件にしますから、當てにしてゐた事が、悉く失はれて、幻滅の悲哀を感ずるのでございます。

結婚は、人ご人ごの、心と體が相交るもので、男性と女性から成る、陰と陽との平等にして、完全なる交りを、結婚と申しまして、之は神様のお定めになりました自然の法則で、之程嚴肅なものはありません。

爲に結婚といふ事は、目に見える、假初の地位名譽財産といふものゝ、有無などは軽く見て、第二位に置いて、餘り之に深く信賴しないといふ、觀念を以て、男女の何れも、健全無比なる肉體と、朗らかにして明るく、神の如き慈悲慈愛の満ちたる眞心とを以て、お互に打てば通するといふ程に、双方の精神的理解が出来

まして、結婚に依つて結ばれた二つの體は、一心同體となつて、眞に相信じ、相愛して、終生塵程の疑心等も、その間に交へない様に、苦樂を共に負うて行く所に、眞の結婚生活への喜びがあり、その中にこそ、世間の信用も尊敬も受け、家運も向上して、富み榮えるのみでなく、絶對的に相信じ、相愛する、夫婦生活の間から、心身共に健やかにして、國實的な子寶が、生れて來るのでございます。假令幾億の財産を持ち、金銀財寶を積み重ねて、その中に陶醉してゐても、眞の結婚を誤つた場合は、絶對に幸福は得られません。

それのみか、却つて身に持てる、金銀財寶地位名譽のために禍されて、眞の夫婦生活の尊さといふ事を、一生味ひ知る事が出来ないのみか、親子としての、絶對の愛情さえ、味ふ事が出来ないといふ、慘めな淋しい生活に、終生を涙の中に終る人々の世の中に多くある事を、考へなければなりません。

今後の若き人々は、眞に目覺めて、結婚は絶對的に、心身の健康と、深く固き信

仰的かうてきしんねん信念しんねんを持つ事ことを、條件てうけんとしなければならぬといふ事ことを、御承知願ごせうちねんひ度たいいと思おもひます。

真心まごころを共にあはせて當りなば

如何いかなる業わざも成なし遂すぐるなり

家内和合の秘決

問「家庭かていと申まうしますものは、大概たいがいは親子兄弟夫婦おやこけうだいふうふといふ様やうな、特別親とくべつしんしい關係かんせいの者ものが集あつつて住すむのですから、お互たがひに仲なよく、力ちからになり合あつて、平和へいわに暮くもされさうに思おもひますが、その實大抵じつたいていの家庭かていを見みますと、始終しじう何とか彼かとか、多少たせうの争あそひがあつて、悶着もんちやくの絶間たさまない家うちが多い様やうでございますが、何なんとかして、始終しじう家庭かていが圓滿えんまんで樂たのしく暮くもされる方法はうほうはないものでございませうか。」

答「それはお互たがひに、自分じぶんはよい、人ひとが悪いと考かんがへてゐる人ひとばかりが集あつつてゐると、いづも争あそひが絶たえず、始終しじうこた／＼するものであります。

それは、財産ざいさんがあるとか、地位名譽ちゐめいよが高いとか低いとか言いふ様な事ことに依よるのではなく、本當ほんたうに家族かぞくの人達ひとたちの、心こころの持方もちかたに依よるのでございます。

例たとへて申まうしますと、同じおな一つの器うつわが破われても、破わつた人ひとを外ほかの者ものが、叱しかります。すると破わつた者ものは、「こんな所ところに何故置おいたのだ」と言いひ返かへします。

といふ風ふうでは、とても納おさまりはつきませぬ。それを破わつた人ひとが、「あゝ悪わるかつた。」と、飽迄あくまで自分じぶんの粗忽せこつの罪つみを詫わびます。

すると、一方ひうの方ほうでは、「それは貴方あなたが悪いのではない。そんな所ところに置おいた私わたしが悪わるかつた。」

と半分罪はんぶんつみを負おうて、詫わびれば、其處そこに人情にんじやうの華はなが匂にほつて、和氣霽々わきあいくの中にすんで終しまひます。

同じ御飯を炊くにしても、三度が三度、同じ様な結構な御飯が出来るものではない。

お米に依つても、薪に依つても、大變加減に差が出来るものです。

御飯の加減の悪かつた時、外の者が、

「こんな煮え害なつた御飯なんか食べられない。」

と言へば、炊いた人が、

「たまには煮え害ふ事もあるのです。」

叱言を言ふなら、自分で一度炊いて見るが、いゝ。」

と口返答をして、反抗します。すると、

「毎日御飯を炊いてゐて、炊き損ふといふ事があるか。それはお前が、行届かぬからだ。」

と主人が罵りますと、うち中喧しくなりますが、主婦が始め淑やかに、

「今日はうつかりして居りまして、御飯が出来損ひましてすみません。」

どうぞ耐えて召上つて下さい。」

と詫びて出せば、主人は

「何いゝよ。たまには出来の悪い御飯を食べさせて貰つてこそ、出来のよい御飯のおいしさも解るといふものだ。」

毎日々々の御飯の世話も大抵じやないんだから、御苦勞だと思つてゐる。

たまには出来損ふ事は、ありさうな事だよ。」

と慰めますと、子供達も却つて母に、深い親しみと感謝の念を持ち、父には敬愛の念を深めて行くものであります。

夫婦の間柄で慎しみがなく、親の前子の前も憚らず、口汚く責任を他へ押しつけて争ふ様な事を致しますと、奉公人達も皆それに習つて、自分の事は氣つかないで人の事ばかり責め、責任を皆相手に負はせる様な事を言つたり、又露骨に醜い自

我心を現はして、子供等はお菜につけた魚の大きい小さいにも、争ひ合つて騒ぎ立てる様な事になります。

皆之家庭の圓滿に治るのは、その家の中心になる主人や主婦が、深い信仰的信念を以て、物を尊び、謙遜な態度を以て、自分に責任義務を勇敢に負うて、その徳の下に、總べての人を、慈しみ培つて行くといふ、大きな愛の心があれば、家中は始終平和で、幸福が漂つてゐるものでございます。かうした家庭の中には、病人も出来ず、盗難もなく、始終うるはしい人情が漂ひ自然に家も富み榮え、明るい光が射して、家の品格が尊く見えるものでありますから、周圍から何となく尊敬の念を持たれる様になるものでございます。

言の葉の上に匂ひて床しきは

人の心の花にぞありける

世の中の人に交る道

問 「始終家の中にはかりゐるのでしたら、家庭が圓滿でうるはしく暮して行けたら結構でございますけれども、さういふ風にはかりは参りませんもので、世の中へ出て色々な人と交つて行かなければなりませんのですが、どんな人でも、本當に心から親しめて、おつき合ひが出来たら、愉快だらうと思ひますけれども、世の中の人には職業も、種々様々に變つてゐますし、性質も別々で、地位や學力や資産等の差別もありますから、そんな事のために、誰とでもびつたりと心持が合つて蟠りなく、つき合つて行くといふ事が出来ませんために、何となく物足りない様な、淋しさを感じます事がございますが、何とかして、總べての人達と、眞から親しみ合つて、愉快につき合つて行ける道はございませんでせうか。」